

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XIX

1999年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XIX

2003. 3

本書には1999年度の長原遺跡西南地区の発掘成果を収録する。

この発掘調査では、古墳時代の遺構として、長原古墳群を構成する古墳時代中期の古墳が新たに1基見つかり、古墳～平安時代の集落の一部も検出された。また、江戸時代の馬池の堤を調査し、築堤の様子がわかった。

長原村の庄屋・城家に伝わる古絵図をもとにした、近世長原村と馬池の歴史的景観についての考察を収録する。

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XIX

1999年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会



長原道路西南地区 212号墳

『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XIX 正誤表

頁	位 置	誤	正
3	図2 左端	95-44	83-44
47	図38 中央	鳴山	鳴山

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XIX

1999年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は、大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業に伴う発掘成果を収めた『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』シリーズの19冊目に当る。

本書では1999年度に行った調査成果を収録している。区画整理事業も終盤を迎え、本年度の調査地は長原遺跡西南地区の3個所にとどまったが、各時代にわたる多くの成果が得られた。

古墳時代の成果として、長原古墳群を構成する古墳1基が新たに見つかり、建物や溝の検出で、当時の生活のようすが一層鮮明となった。馬池西岸の調査では、飛鳥時代から平安時代にいたる集落の一部も検出した。また、中・近世の馬池の築堤過程を考古学的に追える資料が得られた。特に後者は当地方の大変革であった近世大和川付替え工事前後の変化を、遺跡で復元できる好個の資料である。

このように調査結果に基づいて、当地の歴史をより豊かに復元できるようになった。今後は、調査成果を多くの市民に還元すべく、普及・啓発活動に努めたい。

最後に、発掘調査および報告書作成にあたって、ご理解、ご協力を賜った関係機関各位と、玉稿をお寄せいただいた先生に、心よりのお礼を申し上げる。

2003年3月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は大阪市建設局長吉瓜破区画整理事務所が施行した、大阪市平野区内における1999年度土地区画整理事業施行に伴う発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長京嶋寛の指揮のもとで、調査員(現、学芸員)絹川一徳・池田研が行った。各調査の地番・面積・期間・担当者は表1に記した。
- 一、本書の編集および執筆は京嶋の指揮のもと、上記学芸員との検討や調査記録をもとに、調査課主任学芸員黒田慶一が行った。石器遺物の記述については、絹川の教示を得た。英文要旨の作成は黒田が行い、ロンドン大学大学院生の幕内博子氏の御教示を得た。
- 一、遺構写真は担当者が撮影した。図版の遺物写真の撮影は西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市建設局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話株式会社・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。
- 一、本書に掲載した石器遺物は、大阪市文化財協会での石器整理番号である登録番号で管理されている。各石器遺物の登録番号は、本文で使用した報告番号の前に99-23次調査は99AD、42・43次調査は99AF、46次調査は99AGを付加したものとする。例：報告番号12の場合は99AD12。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。

凡 例

- 一、本書において用いる地層名は、原則的に各調査ごとに個別に記載する。長原遺跡の標準層序との対比は[趙哲済2001]に基づいて行い、標準層序の表記は、文中では長原○層とし、図表等ではNG○層とした。
- 一、遺構検出面の層序関係に基づく呼称および形成過程に基づく呼称は、[趙1995]に従って行った。
- 一、遺構名の表記には、竪・槽(SA)、掘立柱建物・竪穴住居(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、土壇(SK)、ピット(SP)、畦畔(SR)、その他の遺構(SX)の略号を用いた。略号の後ろには各調査回数ごとの通し番号を付した。
- 一、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±〇mと表記する。また、挿図中の方位は座標北を示し、座標値は国土平面直角座標(第Ⅵ系)の値である。
- 一、本書で頻繁に用いた土器編年や記述は下記の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することは行わない。円筒埴輪：[川西宏幸1978]、古墳・飛鳥時代の須恵器：[田辺昭三1981]、飛鳥・奈良時代の土器：[古代の土器研究会1992]、中世の土器：[中世土器研究会1995]、近世の陶磁器[九州近世陶磁学会2000]・[大橋康二1994]
肥前陶磁器の時期区分は以下のとおりである。
Ⅰ期：1580～1610年代、Ⅱ期：1610～1650年代、Ⅲ期：1650～1690年代、
Ⅳ期：1690～1780年代、Ⅴ期：1780～1860年代

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 調査の経過と概要	1
第1節 1999年度の発掘調査と報告書の作成	1
1) 発掘調査	1
2) 報告書の作成	1
第2節 発掘調査の経過と概要	3
1) 99-23次調査	3
2) 99-42・43次調査	4
3) 99-46次調査	5
第Ⅱ章 長原遺跡西南地区の調査結果	7
第1節 99-23次調査	7
1) 層序とその遺物	7
i) 層序	
ii) 各層出土の遺物	
2) 遺構とその遺物	11
i) 古墳時代	
ii) 中世	
iii) 更新世	
3) 小結	16
第2節 99-42・43次調査	17
1) 層序とその遺物	17
2) 遺構とその遺物	18
i) 古墳時代	
ii) 中世	
iii) 近世～近代	
3) 小結	25
第3節 99-46次調査	28
1) 層序とその遺物	28
2) 遺構とその遺物	30
i) 飛鳥～平安時代	
ii) 江戸時代	
3) 小結	40
第Ⅲ章 遺構の検討	43
第1節 発掘成果から見た馬池	43

1)調査成果	43
2)絵図との比較検討	44
第2節 河内国丹北郡長原村の景観と馬池	45
1)はじめに	45
2)村絵図にみる村の景観と特色	48
3)近世村落景観の成立	51
4)居村の増加と西方・東方	53
5)新大和川の開鑿と馬池の改変	55
6)おわりに	57
引用・参考文献	59
あとがき・索引	
英文要旨	
報告書抄録	

原色図版目次

1 長原村絵図[享保4年]

2 長原村絵図[天保14年]

図版目次

- | | |
|---|---|
| 1 99-23次調査 古代の遺構と地層断面
上：Ⅰ区全景(北から)
下：Ⅰ区西壁(北東から) | 8 99-46次調査 古代の遺構
上：調査地全景(北から)
下：SX309(南から) |
| 2 99-23次調査 古代の遺構
上：Ⅱ区全景(南から)
下：Ⅱ区 SD702(南から) | 9 99-46次調査 古代の遺構
上：SD305(北から)
下：SD305(東から) |
| 3 99-23次調査 古代の遺構と中位段丘構成層上面の足跡化石
上：Ⅲ区全景(南から)
下：Ⅱ区中央 大型偶蹄類動物足跡化石(北から) | 10 99-46次調査 古代の遺構
上：SE301～303遺構断面(西から)
下：SE301～303(西から) |
| 4 99-23次調査 中位段丘構成層上面の足跡化石
上：Ⅱ区 大型偶蹄類動物足跡化石検出状況
下：Ⅱ区 大型偶蹄類動物足跡化石完掘後 | 11 99-46次調査 近世の遺構
上：調査地全景(北から)
下：南壁地層断面(北から) |
| 5 99-42・43次調査 古代の遺構
上：調査地全景(北から)
下：SD701検出状況(北から) | 12 99-46次調査 近世の遺構
上：馬池西堤地層断面(北アゼ、南から)
下：馬池西堤地層断面(南アゼ、南から) |
| 6 99-42・43次調査 古代の遺構
上：長原212号墳(西から)
下：調査地全景(南から) | 13 99-23次調査 石器遺物 1 |
| 7 99-42・43次調査 馬池の東堤
上：堤断面(北から)
下：堤断面(南から) | 14 99-23次調査 石器遺物 2 |
| | 15 99-42・43次調査 古墳時代の遺物 1 |
| | 16 99-42・43次調査 古墳時代の遺物 2 |
| | 17 99-46次調査 古代の遺物 |
| | 18 99-46次調査 古代と近世の遺物 |

挿 図 目 次

図1	土地区画整理事業施行範囲と調査地	2	図22	石器遺物	23
図2	長原遺跡西南地区の調査位置	3	図23	遺構出土陶器	23
図3	99-23次調査区配置図	4	図24	長原212号墳周辺図	24
図4	99-42・43次調査区配置図	5	図25	長原古墳群分布図	25
図5	99-46次調査区配置図	6	図26	断面図	28
図6	西壁地層断面	8	図27	各層出土遺物	29
図7	石器遺物	9	図28	平面図	31
図8	第3・4b層、SD301出土遺物	10	図29	SD305出土石器遺物	32
図9	I区平面図	11	図30	遺構出土須恵器・土師器	33
図10	SP704出土土師器	12	図31	遺構出土遺物	34
図11	SB702建物配置	12	図32	SD202出土陶磁器	37
図12	Ⅲ区平面図	13	図33	瓦質土管	38
図13	Ⅱ区平面図	14	図34	瓦質土管111内面 製作痕跡	39
図14	Ⅱ区足跡・化石平面図	15	図35	馬池周辺の字名	44
図15	東壁断面図	17	図36	村絵図1	45
図16	包含層出土遺物	18	図37	村絵図1 トレース図	46
図17	古代遺構平面図	19	図38	長原地域近代の字名	47
図18	埴輪	20	図39	村絵図6	50
図19	SD704出土須恵器	21	図40	村絵図4	53
図20	馬池東堤平面図	21	図41	天保2(1831)年の年貢免状	54
図21	東堤断面図	22	図42	村絵図5	55

表 目 次

表1	1999年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧	1
----	-------------------------	---

写 真 目 次

写真1	SE301~303出土土師器甕	35	写真3	村絵図2	56
写真2	村絵図3	49	写真4	村絵図2の裏書き	57

第Ⅰ章 調査の経過と概要

第1節 1999年度の発掘調査と報告書の作成

1) 発掘調査

1999年度の土地区画整理事業に伴う発掘調査件数は4件[うち2件(99-42・43)は一つの調査区であるので、一括して報告する]、発掘総面積は598㎡で、すべて長原遺跡西南地区である(図1、表1)。調査はまず99-23次調査が7月8日から開始し、翌2000年3月23日に99-46次調査が終了したのを最後に、当年度の調査事業をすべて完了した。各調査次数の担当者・調査面積・調査期間は表1のとおりである。各調査とも基本的には、現代盛土および現代作土を重機掘削し、それ以下を人力掘削し、遺構の精査に努めた。また、調査深度が大きい場合、必要に応じてH鋼と横矢板を用いて土留め工事を実施した。調査で検出した遺構および遺物は、実測図・写真によって記録した。なお調査次数は遺跡記号NG(長原遺跡)の後に年度、各年度における調査開始順の番号を付けて表記しているが、煩雑であるため、本書ではNGを省略して表記する。

2) 報告書の作成

現場終了後の遺物の水洗・マーキング・接合およびおもな遺物の図化、写真の整理などの基本的な整理作業、および各現場における層序、遺構の検討は、終了後ただちに各調査担当者が行っている。2001・2002年度の報告書作成に伴う図面・写真・遺物などの整理作業は、調査課長京嶋、長原調査事務所長高橋の指揮のもと黒田が行い、各調査次数の報文の編集・執筆は、各調査担当者が作成した完了報告書をもとに、黒田が行った。

表1 1999年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧

発掘次数	面積	調査地番	担当者	調査期間
長原遺跡西南地区				
NG99-23次	97㎡	平野区長吉長原西3丁目	緒川一徳	1999年7月8日～1999年9月13日
NG99-42次	170㎡	同 長吉長原西3丁目	緒川一徳	1999年11月15日～2000年3月6日
NG99-43次	163㎡	同 長吉長原西3丁目	緒川一徳	1999年11月22日～2000年3月21日
NG99-46次	168㎡	同 長吉長原西3丁目	池田 研	1999年12月1日～2000年3月23日

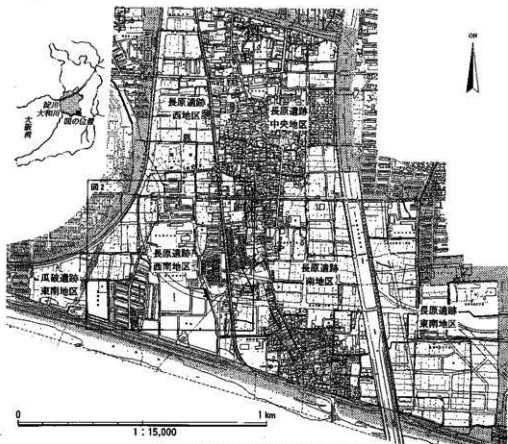


図1 土地区画整理事業施行範囲と調査地

第2節 発掘調査の経過と概要

1) 99-23次調査

本調査地は長原遺跡西南地区に属し、97-29次調査地の西側に位置する(図2)。既往の調査結果によると、本調査地は通称「馬池谷」の東屑に当ること、北側の既調査地(97-8次など)では古墳時代の集落に関わる遺構が多数見つかっており、この付近が古墳時代集落のほぼ南限に当ることが明らかとなっている。

本調査地東側に位置する97-29次調査地では古墳時代の遺構分布が稀薄であり、北端部で「馬池谷」に合流する南東から北西方向の支谷が存在したことから、この支谷が古墳時代

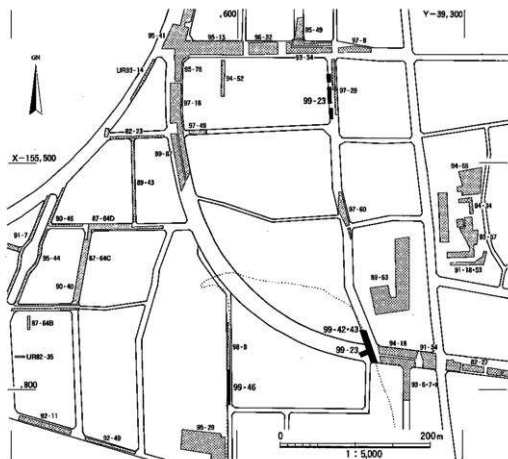


図2 長原遺跡西南地区の調査位置(点線は馬池の輪郭)

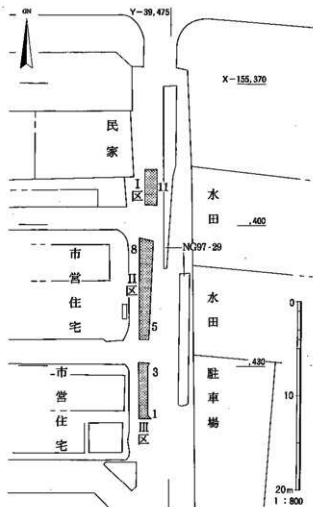


図3 99-23次調査区配置図

集落域との境界となっていた可能性が高い。今回の調査では、こうした古墳時代集落域の範囲の再確認、97-29次調査で見つかった支谷と「馬池谷」の東肩部の地形的な関係を解明することをめざした。

調査に先行して7月1日より予定地内のガスマ渠路の確認作業、周辺街路の交通安全対策等を行い、7月8日より準備工に着手した。7月15日からは、安全な作業範囲を確保した上で、機械掘削作業をH鋼打設作業と一部並行させながら開始し、現代盛土を除去した。調査区は北から南へⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区に分けて調査に入った。

以後は人力で掘削し、適宜遺構の精査・検出等の作業を行った。当地の調査は8月23日に終了し、埋戻し・H鋼の引き抜き作業・路面復旧作業等を経て、9月13日にすべての現場作業を終了した。な

お、8月24・25日に99-42・43次調査地の試掘調査を行った。その成果については次項で述べる。

2) 99-42・43次調査

本調査地は長原遺跡西南地区に属し、現在は埋め立てられた馬池の東岸に位置する(図2)。周辺には北東側に89-63次、東側に82-27、91-54、93-6・7・18、94-18次などの既往の調査地がある。

特に本調査地東側の一連の調査では、古墳時代中期前半の造出し付円墳である一ヶ塚古

墳の造出し周辺部、北から南西にかけての周濠と墳丘部分が調査されている。また、一ヶ塚古墳の周辺には91-81次調査地の長原196号墳のような陪冢の可能性のある小規模な古墳が認められている。同墳の西側に当る本調査地でも、こうした小規模な古墳が存在する可能性があった。

一方で、本調査地には近年まで灌漑用調整池として機能していた馬池の周囲に巡らされた堤が残されており、この馬池の形成と築堤の時期的な関係、さらには1704年の大和川付替え工事に伴う堤の改修状況をあわせて確認することも今回の調査の目的とされた。

調査に先行して8月24・25日に99-42・43次調査地の工区境界付近において1個所の試掘を行い、馬池内に堆積した水成層の遺存状況を確認した。その

後、調査地周辺街路の交通安全対策等を行った上で、11月15日より99-42次調査地の準備工を開始し、続いて11月22日より99-43次調査地の準備工に着手した。河調査地のH鋼打設作業は12月3日に完了した。12月6日から河調査地の機械掘削作業を開始し、現代の東堤盛土と馬池の埋土を除去した。以後は人力で掘削し、適宜遺構の精査・検出等の作業を行った。

3) 99-46次調査

本調査地は長原遺跡西南部に位置し、埋積谷である「馬池谷」の西屑に当る(図2)。これまでに行われた周辺の調査で、調査地の北方では古墳時代の集落が、西方では飛鳥時代の掘立柱建物群の存在が確認されている。北接する98-8次調査地では、掘立柱建物・溝・土壌など古墳時代中期から後期にかけての遺構のほか、江戸時代の導水施設が検出された。

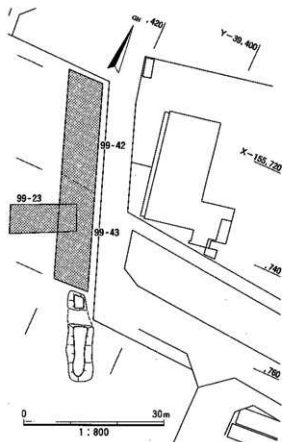


図4 99-42・43次調査区配置図

調査に先立って、調査区内の擁壁を撤去した後、H鋼と横矢板による土留め工事を行った。1月6日から3月1日にかけて行った調査では、調査区を南北に9分割、東西に2分割する区画割りを行い(図5)、現代盛土および馬池の堆積層を重機で、以下を人力で掘削した。調査区南部で検出されたSE301~303については壁面が一部崩落するなどしたため、最終的に重機により掘削を行い遺物の採集に努めた。また、南アゼ断面ではナウマンゾウの足跡の可能性がある凹みが確認されたことから、第6・7区の第5層上面で足跡化石の検出に努めた。埋戻しを含めたすべての作業は3月23日に終了した。

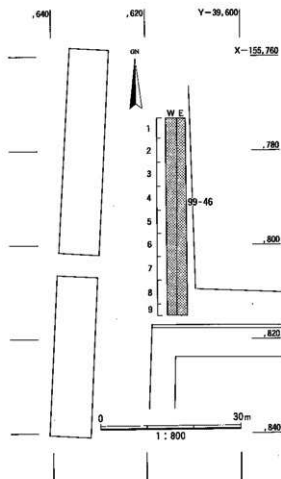


図5 99-46次調査区配置図

第Ⅱ章 長原遺跡西南地区の調査結果

第1節 99-23次調査

1) 層序とその遺物

i) 層序(図6、図版1)

調査地の現地表面は、Ⅰ区北端でTP+11.4m、Ⅲ区南端でTP+11.6mと、北側に向いやや緩やかに下がっている。現代盛土の層厚はⅠ・Ⅱ区で1.4m、Ⅲ区で1.5~1.6mである。

調査区の基本的な層序、ならびに長原遺跡標準層序との対応関係は以下のとおりである。

第0層：現代盛土である。

第1a層：黒色(5Y2/1)極細粒砂質シルトで、旧表土層である。腐植化が著しい。層厚は約10cmである。

第1b層：オリーブ黒色(5Y3/1)細礫混りシルト質細粒砂~細粒砂質シルトで、現代作土層である。層厚は約10cmである。

第2層：灰色(5Y5/1)シルト質極細粒砂で、作土層である。層厚は5cm以下で、断続的に堆積していた。瓦・国産陶磁器などが出土した。長原2層に対応する。

第3層：灰オリーブ色(5Y5/2)細礫混り細粒砂質シルト~シルト質細粒砂で、作土層である。Ⅲ区では層厚10cm程度の安定した堆積が認められたが、南に向かって層厚を減じ、Ⅰ区では上位の作土層によって削平されていた。瓦・土師器・瓦器・須恵器などが出土した。

第4a層：オリーブ灰色(5GY5/1)中~細粒砂である。Ⅰ区とⅢ区北端のみで認められた。層厚は10cmであった。長原4A層に対比される。

第4b層：Ⅱ・Ⅲ区では灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂混りシルト~シルト質細粒砂、Ⅰ区では黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルト~にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトとして認められた。Ⅰ区では北側に向い層厚を増し、砂質の優勢な複数の作土層に細分することができた。また、Ⅲ区では南端付近において下部が粘土質シルトへと漸移的に変化してい

た。層厚は平均して5～10cm程度である。細分された各作土層からはいずれも瓦器が出土したが、細片がほとんどであった。長原遺跡標準層序と細分された作土層の詳細な対比は

困難であり、一括して長原4B層として認識しておく。

第5層：暗灰黄色(2.5Y4/2)～オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト～シルト質粘土である。遺構埋土としてのみ認められた。Ⅲ区を中心に認められた。長原7A層に相当するものと思われる。

第6層：Ⅰ区では黒褐色(10YR3/2)～褐色(10YR4/4)粘土質シルト～シルト、Ⅱ区では黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂混り粘土質シルトとして認められた。いずれも遺構埋土としてのみ認められた。第5層よりも暗色味が強い。長原7B層に相当するものと思われる。

第7層：黄褐色(2.5Y5/4)細礫混りシルト質粘土である。Ⅲ区のみで認められた。南端部を中心に淡く暗色化していた。長原15層を母材として風化・土壌化したものと思われる。長原13層に相当する。

第8層：灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒砂～砂礫である。Ⅰ区でのみ認められた。下方に向い、砂礫が優勢となる。しまりはゆるい。長原15層に相当する。

第9層：上部のシルト質粘土層と下部の砂礫層に分かれる。両者の層界はやや漸移的である。上部は黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルトで、Ⅱ区を中心に認められた。非常に固くしまった地層である。著しいクラックを全面に観察することができた。層厚は約40cmであった。下部は灰オリーブ色(5Y5/3)砂礫であり、Ⅱ区の南端からⅢ区にかけて厚く堆積していた。層厚は1m以上である。いずれも長原16層に対比される。

ii)各層出土の遺物

石器遺物(図7・8、図版13・14)

まず後世の包含層出土の石器遺物をみておく。すべて

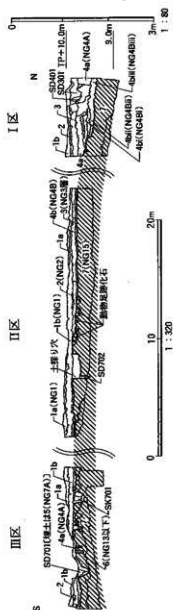


図6 西壁地層断面

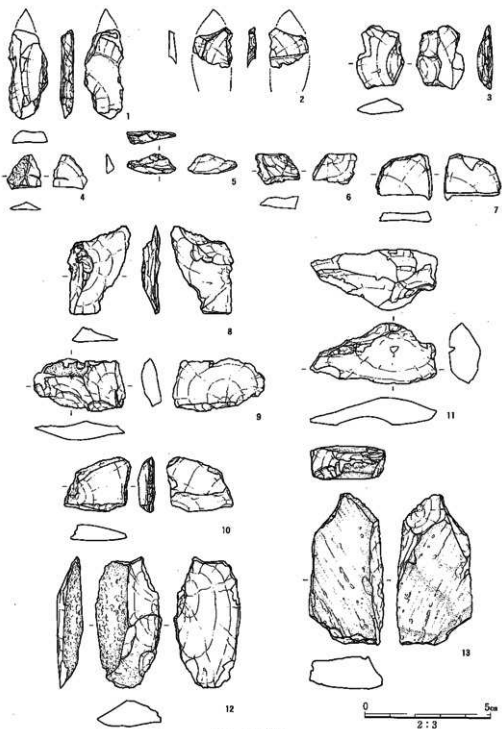


图7 石器遗物

第2層(13)、第4b層(1·2·6·7·9~12)、第4b~地山直上層(3·8)、地山直上層(4·5)

サヌカイト製である。

1はナイフ形石器である。横形剥片を素材とする。背面左側縁の裏面より、やや粗い背部調整を施している。

2は細部調整のある剥片で、上下両端を欠損する。ナイフ形石器の可能性はある。

3は細部調整のある剥片で、素材剥片の打面部を中心に、若干の細部調整が施されている。

4・5・6は横形剥片である。

7は横形剥片で、1/2を欠損している。

8は横形剥片である。石器素材を意図した目的的な剥片であった可能性はある。

9は横形剥片である。石器素材を意図した目的的な剥片であった可能性はある。

10はクサビの剥片である。末端部に細かい調整が連続して認められるが、風化の度合が若干浅く、自然為による可能性はある。

11は横形剥片である。石器素材を意図した目的的な剥片であった可能性はある。

12は横形剥片である。石器素材を意図した目的的な剥片であった可能性はある。

13は横形剥片である。末端部を大きく欠損する。

各石器遺物の所属時期は、後世の作土層などより出土したため、明確に断じることはできないが、ナイフ形石器や風化の浅い石器遺物が混在していることから、旧石器～弥生時代までの幅広い時期の遺物が、包含されているものとみられる。

第3層出土遺物(図8)

土師器皿15・16が出土した。15は復元口径9.2cm、16は10.4cmで、16世紀末のものと思

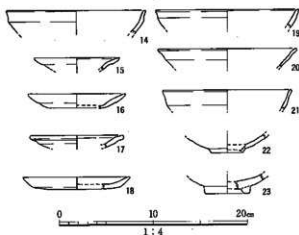


図8 第3・4b層、SD301出土遺物

第3層(15・16)、第4b層(14・17~22)、SD301(23)

われる。また本層基底面で検出した東西溝SD301(幅1.6m、深さ0.3m)からは唐津焼碗23が出土した。

第4b層出土遺物(図8)

土師器皿17・18を検出した。復元口径は17が10.0cmで、ての字形の口縁部をもち、12世紀と考えられる。18が11.5cmで、平坦で広い底部から短い体部が斜め上方に伸びる。13世紀頃と考えられる。

瓦器碗14・19～22が出
土し、14・19～21が口縁
部で、22が底部の破片であ
る。14は内外両面にミガキ
が見られ、12世紀後半だ
が、ほかは13世紀以降のも
のと思われる。

2) 遺構とその遺物

今回の調査では中世から
近世にかけての鋤溝群・
溝・土壇と古墳時代から飛
鳥時代の掘立柱建物・柱
穴・溝・土壇などを検出し
た。全般的に遺構の分布は
稀薄であったが、集落に係
わる遺構をⅠ区とⅢ区で認
めることができた。また、
Ⅱ区では長原15層基底付近
から踏込まれたとみられる
大型偶蹄類動物の足跡化石
を検出した。

各遺構の概要は以下のと
おりである。なお、地山上
面での検出ではあるが、埋
土で時代が推定できるの
で、本調査に限って遺構の
通し番号の百桁の数字は、
長原標準層序に準ずること
とした。

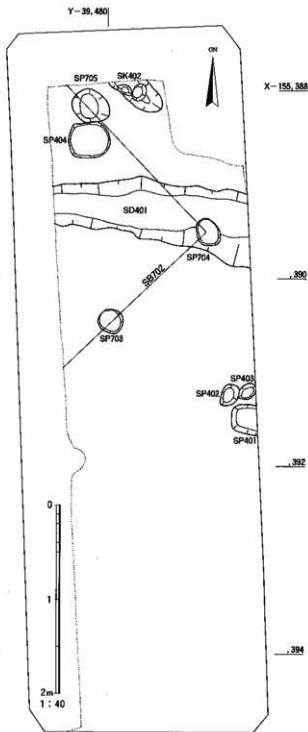


図9 Ⅰ区平面図

i) 古墳時代

第6層基底面検出遺構

I区において、地山層(第8層)上面で第6層を埋土とするSP703~705を検出した。各遺構とも土師器24を除いて、出土遺物はほとんど認められなかった。土質の特徴から長原7B層に相当すると思われる。

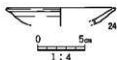


図10 SP704出土土師器

SP703~705(図9~11、図版1) 掘立柱建物SB702を構成する柱穴で、いずれも直径25~40cmの円形もしくは不整形円形で、深さは40cmを測る。建物の主軸は南東-北西方向かあるいは南西-北東方向のいずれかであるが、SP703とSP704の心々間が

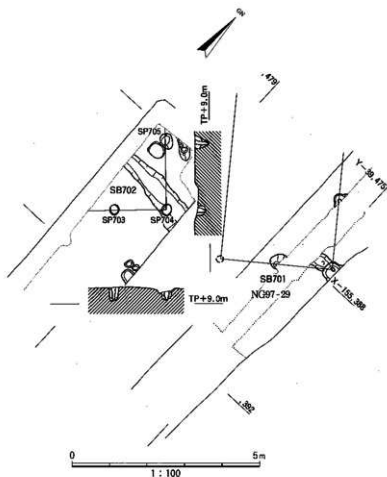


図11 SB702建物配置

1.4mであるのに対して、SP704とSP705の心々間は1.9mと広いことから、前者が妻側で後者が桁側である南東-北西方向を主軸にする可能性が高い。主要部分が調査区外へと続いているため、建物規模については不明である。97-29次調査[大阪市文化財協会2001]のSB701との位置関係を示したのが図11である。SB701は建物の方向が北で西に37度振るのに対して、SB702は北で43度振り、若干方位を異にするが、建物の主軸方向はほぼ同じである。

SP704から土師器24が出土した。24は復元口径11.6cmで、傾斜角度からみて小型器台か高杯の口縁部破片と思われる。5世紀前半と考えられる。

当地は古墳時代の通称「西ムラ」に当たり、周囲には古墳時代中期の土器を含む溝・土壌が検出されている。

SD702(図13、図版2)

Ⅱ区の南半で検出した溝で、幅・深さとも0.2mあり北東-南西方向に延びる。SD702は97-29次調査で検出されたSD702と一

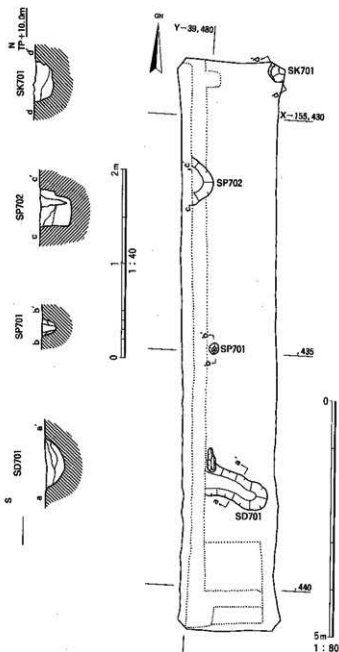


図12 Ⅲ区平面図

連の溝である。

第5層基底面検出遺構(図12、図版3)

Ⅲ区において、地山層(第7層)の上面で第5層を埋土とするSD701、SK701、SP701・702を検出した。各遺構とも出土遺物はほとんど認められなかった。埋土の色調・土質から長原7A層に相当するとみられる。

SD701は長さ1.4m以上、幅0.5m、深さ0.2mの溝である。

SK701は直径0.45m、深さ0.2mの土坑である。

SP701は平面が円形で直径0.2m、深さ0.15mを測るピットである。

SP702は一辺0.7m以上、深さ0.35mを測り、掘立柱建物の柱穴と考えられるが、同一の建物を構成する他の柱穴を調査区内で見つけることはできなかった。

ii) 中世

第4b層基底面検出遺構(図9、図版1)

I区においてSD401、SK402、SP401~404を検出した。

SD401は東西方向の溝で、調査区外へと続いていた。幅0.5~0.7m、深さ0.08mであった。

SK402は平面が短軸0.3m、長軸0.6m以上の長楕円形で、深さ0.2mを測る。

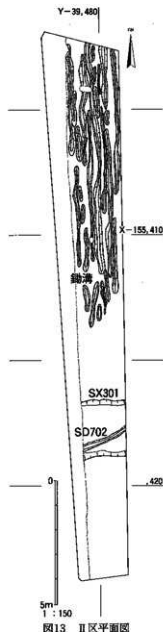
SP401は一辺0.3mの方形で深さ0.1m、SP402は直径0.2mで、深さ0.05m、SP403は直径0.15m、深さ0.05m、SP404は直径0.4m、深さ0.1mの不整形円形である。

第4b層上面検出遺構

I区において東西方向の鋤溝群を検出した。鋤溝は幅0.2m、深さは数cm程度であった。

第3層基底面検出遺構(図13、図版2)

SX301はⅡ区に位置し、南北2.2m、東西1.8m以上、深さ0.2mを測り、埋土には地山のブロックが多数混入していた。土取り用の穴であった可能性が高い。



第3層下面検出遺構

Ⅲ区の北半で、南北方向に延びる鋤溝群を検出した。鋤溝の幅は0.05~0.10m、深さは0.05m程度であった。

第2層下面検出遺構

I~Ⅲ区で南北方向に延びる鋤溝群を検出した。鋤溝の幅は0.10~0.15m、深さは平均0.05mであった。またI区北端で東西方向に延伸する溝を断面で確認した。

iii)更新世

第8層基底面で検出した大型偶蹄類動物の足跡化石(図14、図版3・4)

Ⅲ区では、第4b層の下位は第9層(長原16層)が上位層と不整合面をもって堆積していた。第9層の上面は中世の耕作により削平を受けていたものの、第7層の基底付近から踏込まれた大型偶蹄類動物の足跡化石がまともに見つかった。本来の踏込み面が削平されていたことと、踏込み後に形成された乾痕が第9層の全面に拡がっていたことから、足跡形成時の形状を留めているものは少なく、何らかの変形を起こしたものが大半であった。また、いくつか群集はしていたものの、行跡など

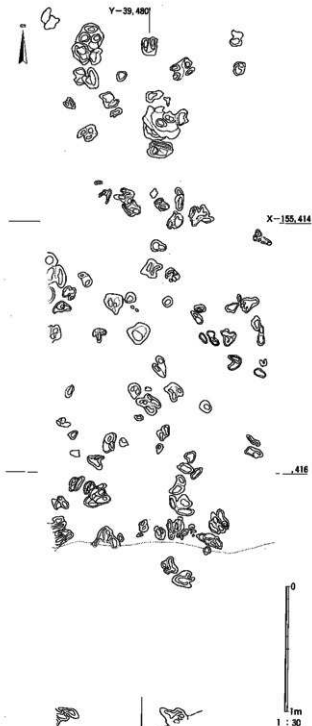


図14 Ⅱ区足跡化石平面図

を特定するにはいたらなかった。足跡から推定される動物種はオオツノジカ・ニホンムカシジカなどが考えられる。本調査地の周辺では、94-52次調査地において長原15層基底面からナウマンゾウの足跡化石が、96-17次調査地において長原17Biii層からナウマンゾウ臼歯片が見つかった。本調査区で見つかった足跡化石は94-52次調査地の足跡化石と同一時期のものと考えられ、約7万年前と推定される。

3)小結

今回の調査では以下の成果を得ることができた。

1、「長原西ムラ」と仮称される古墳時代集落の南限が本調査地の北端付近に位置することが再確認できた。

2、本調査地は「馬池谷」東側に当るが、谷肩部のような斜面地は調査地のさらに西側にあったものと思われる。また、少なくとも古墳時代以降は近世にいたるまで、おもに耕作地として利用されたものと考えられる。

3、長原15層基底面で検出された大型偶蹄類の足跡化石は、既往の調査例では「馬池谷」の西側を中心に分布していたが、その範囲が東側にも拡がることが今回の調査で明らかとなった。

第2節 99-42・43次調査

1) 層序とその遺物(図15・16)

当調査地の基本層序を示す地点はない。以下に東壁(図15)と東堤断面(図21)を提示した。

第0a層：馬池を埋め立てた現代盛土である。

第0b層：東堤を横断するヒューム管布設の際、施行された盛土である。層厚10～20cmである。

第1a～d層は馬池東堤を構成する人為的盛土である。

第1a層：層厚10～20cmの現代表土である。

第1b層：層厚30～50cmの黄褐色中～粗粒砂層で、大正時代以降の盛土と考えられる。

第1c層：層厚約10cmの明褐色シルト質粗粒砂層である。

第1d層：層厚30～50cmのにぶい黄褐色シルト質粗粒砂層で、明治時代の盛土と考えられ、SD201埋没後に施工されている。後述する第3段階である。

第2～5層は東堤盛土の下位で認められた。東堤以外の部分は第7層(長原15層)まで削平を受けていた。

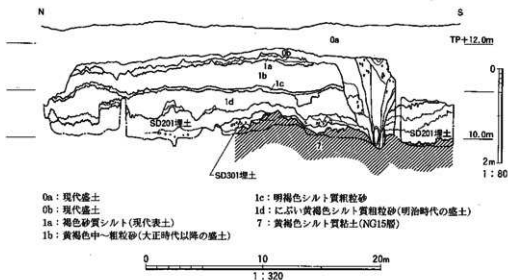


図15 東壁断面図

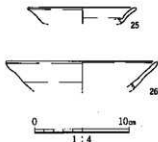


図16 包含層出土遺物
第2層(25)、第4層(26)

第2層：黄褐色(10YR5/6)シルト質細粒砂である。作土層で、層厚は10cmを測る。瓦器をはじめ、埴輪・須恵器・土師器を包含していた。長原4層に対比される可能性が高い。白磁皿25は底部から屈曲して体部が立上る。12世紀後半であろう。

第3層：褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトである。調査区の中央で認められた偶蹄類動物の足跡内にわずかに残されていた。長原標準層序との対比はできなかった。

第4層：明黄褐色(2.5Y6/6)細粒砂質シルトである。作土層で、層厚は5～10cmである。土師器・須恵器・埴輪等の破片を包含していた。土質の特徴から長原7A層に対比される。土師器26は復元口径16.2cmで、高杯の杯部と思われる。5世紀代であろう。

第5層：黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂質シルトである。SD704の遺構埋土としてのみ認められた。長原7B層に対比される。

第6層：明黄褐色(2.5Y7/6)極細粒砂質シルトである。第7層の長原15層が風化・土壌化した地層である。層厚は10～15cmであった。長原13層に相当する。

第7層：明黄褐色(10YR6/6)シルト質粘土～粘土質シルトである。下半部に乾痕が認められた。層厚は約1mであった。長原15層に対比される。

第8層：橙色(7.5YR6/6)～暗緑灰色(5GY4/1)極細粒砂～シルト。下方に向かい、砂からシルトへと細粒化していた。長原16A層に対比される。

2) 遺構とその遺物(図17～25)

今回の調査では中世から現代にかけての馬池東堤の形成過程を明らかにすることができた。この堤の東側、すなわち池の外で並行してはしるSD201・301が検出された。SD201は第2段階、SD301は第1段階の堤が形成された時期に機能したものである。

また、堤の盛土部分の下位には、後世の削平を免れた古墳時代から中世の地層が残されていた。これらの地層の下面・基底面から、鋤溝・溝・土壌を検出した。

各遺構の概要は以下のとおりである。

i) 古墳時代

第5層基底面検出遺構

SD704 調査区の北端付近で検出した。古墳周溝と考えられる(図17、図版5・6)。溝

幅は1.6m、深さは0.1m程度を残すのみだが、溝内からはTK23型式の須恵器杯身、埴輪が出土した。朝顔形埴輪29・32が出土した。29は断面台形のタガ上まで、ナナメハケが至っている。32はタガの断面は三角形である。V期に属すると思われる。円筒埴輪31・34・36～38・40・41が出土した。いずれも低い断面が台形かM字形のタガをもち、調整が観察できるものはタテハケがめだつ。31・40は2次調整としてヨコハケが見られる。円筒埴輪は全体として磨耗が著しく、器面調整を観察しづらかったが、面にタテハケを施したものがめだつ。須恵器杯身42は口径11.2cmで、ていねいな時計回りのヘラケズリが底部全体に施されている。TK23型式であろう。

212号墳 SD704を周溝とする古墳で、墳丘部分は後世の耕作によって削平を受け、盛土等は失われていた。方墳とみられるが、大半が削平により失われているため、正確な規模は不明である。

第4層下面検出遺構

南東-北西方向に延びるSD701～703を検出した。いずれも幅0.25～0.5m、深さ0.05～0.1mで、それぞれの溝の間隔は4～5mであった。畝間溝とみられる。また、調査区の北半でSK701～706を検出した。

ii) 中世

第3層基底面検出遺構

調査地中央において第4層上面で偶蹄類

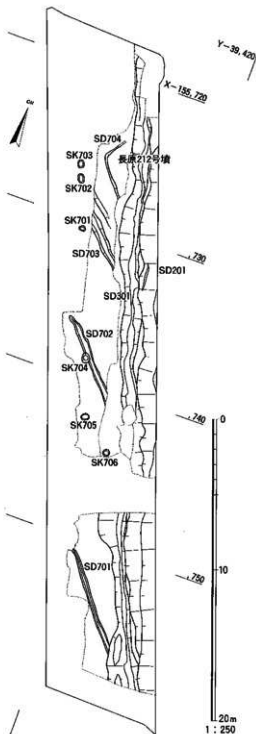


図17 古代遺構平面図

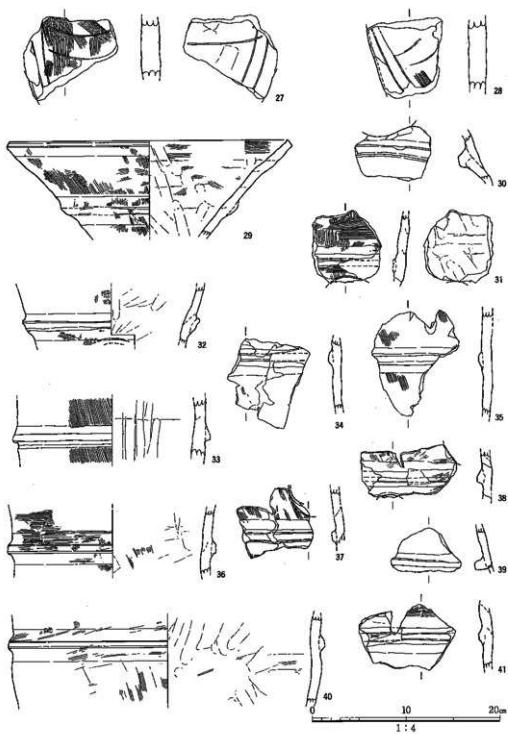


図18 埴輪

SD704(29・31・32・34・36~38・40・41)、東堤最初期盛土(30・35)、
東堤近現代盛土(27・28・33・39)

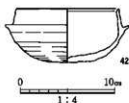


図19 SD704出土須恵器

動物の踏込みによって残された足跡がまとまって見つかった。足跡には第3層が充填していた。正確な時期は不明である。

第2層下面検出遺構

北北西—南南東方向とそれに直交する鋤溝群を検出した。鋤溝の幅は0.1～0.2m、深さは数cm程度であった。また、調査地北半で鋤溝に平行するSD302を検出した。幅0.4m、深さは0.05m程度であった。

iii) 近世～近代

第2層上面検出遺構

馬池東堤がある。以下にその形成過程を示す(図20)。

当調査地は馬池東堤に位置する。現在、馬池は埋立てられており、旧岸辺に沿って南北方向に築かれた堤がそのまま残されていた。この堤の高さはもっとも遺存状態が良好な地点でTP+13.3m、現存幅は約5mであった。

調査地の数箇所で見断面を観察した結果、堤の盛土の形成過程は以下の段階に分けることができた。

第1段階：細粒砂質シルトを主体とした最初期の盛土で、おもに作土を母材とする。後の段階に一部削平を受けており、本

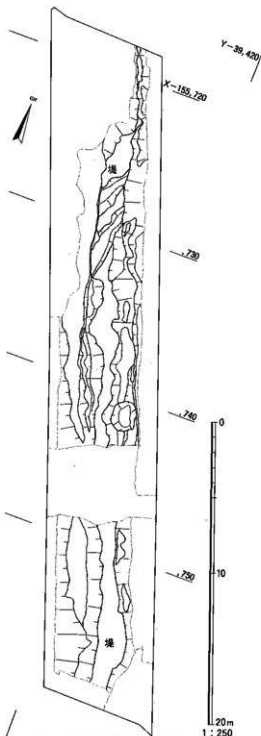
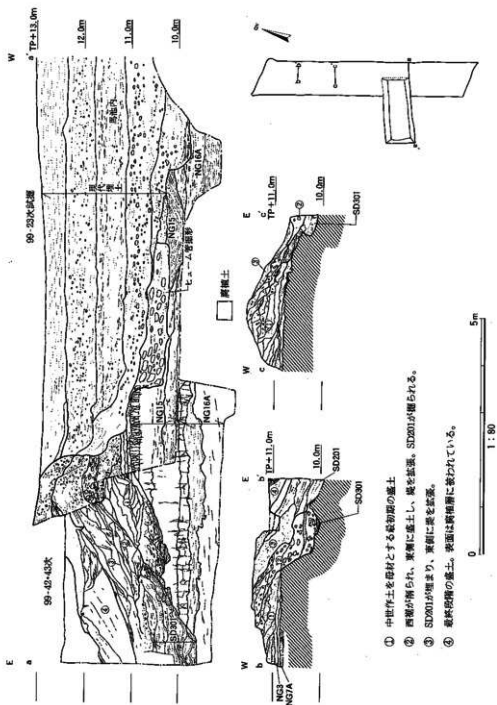


図20 馬池東堤平面図



- ① 中世作土を母材とする最初期の盛土
- ② 西側が削られ、東側に盛土し、堤を拡張。SD201が掘られる。
- ③ SD201が埋まり、東側に堤を拡張。
- ④ 最終段階の盛土。表面は腐植層に覆われている。

図21 東堤断面図

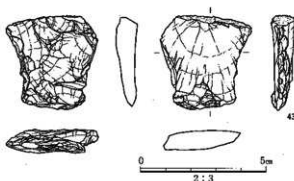


図22 石器遺物
東堤最初期盛土(43)

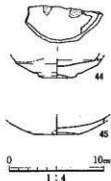


図23 遺構出土陶器
SD201(44)、東堤近現代盛土(45)

来の堤の形状や規模については不明である。もっとも遺存状況が良好な部分で幅2m、盛土の層厚は0.6mであった。削平を受けているため、実際はこれ以上の規模であったと思われる。円筒埴輪30・35が検出された。30はタガの断面が高い台形で、Ⅲ期のものと思われる。35は低いタガで、タテハケ調整が認められる。

石器遺物43はサヌカイト製のクサビである。幅広の剥片を素材としており、末端部に敲打により生じた微細剥離痕が認められる。背面左側縁部には細部調整が施されている。

第1段階には東堤に並行するように、東側にSD301が掘られていた。SD301は幅0.7～1.5mで、溝底面から第1段階の盛土上面までの比高は、調査地南端付近で1.1m以上あった。SD301はシルト～粗粒砂からなる水成層で、ラミナが顕著である。埋没時期のわかる遺物は出土しなかった。

第2段階：前段階の堤の西裾が大きく削り込まれ、堤を東側に拡張するように盛土が行われる。地山のシルト質粘土～粘土のブロックを多量に含んだ盛土が主体となる。一部でシルト質細～中粒砂の盛土も認められた。盛土上面のレベルはTP+12.0mで、層厚は最大1.4mであった。この段階にも堤に並行するように東側にSD201が掘られていた。SD201の東肩は調査区内では検出することができなかった。溝幅は少なくとも2m以上あったとみられる。また、調査区内で確認しえた溝底面と盛土上面との比高は2.2mであった。唐津焼碗44は内面に灰釉を施すが、底部外面は露胎である。見込みに練り砂目痕がみられる。Ⅱ期で、17世紀前半に位置する。

第3段階：SD201に水成層が堆積し、溝がほぼ埋まりかけた段階で再び盛土が行われる。この段階も堤は東側に拡張されている。シルト混り細～中粒砂を主体とした盛土で、おそらくSD201内に堆積した水成層を母材としたものと考えられる。

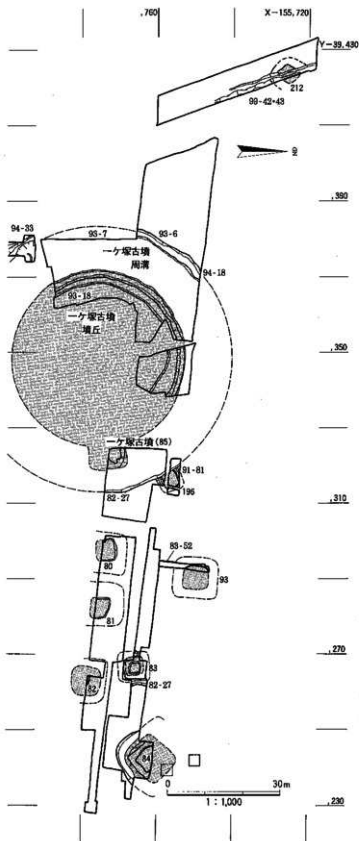


図24 長原212号墳周辺図

第4段階：盛土はシルト混り細～中粒砂を主体とする。ごく部分的に行われた盛土である。

第5段階：中～粗粒砂を主体とした盛土で、盛土の表面は腐植層で被われている。最終段階の盛土である。盾形埴輪27・28は両面にハケ調整後、沈線で弧と直線を描いている。円筒埴輪33・39が出土し、33はタガの断面は低い台形で、タテハケが見られる。V期である。39は非常に高い断面台形のタガをもつ。

Ⅲ期であろう。関西系陶器45は基筒底の鉢で、18世紀以降のものと思われる。

第1～5段階の盛土には須恵器・土師器・埴輪等の破片が包含されていた。

第1段階の堤盛土の下位は作土層が認められ、この層からは土師器・須恵器・瓦器等が出土したが、国産陶磁器は認められなかった。したがって、第1段階の東堤は中世から近世にかけての時期に構築されたと

推定しうる。

第2段階は堤盛土の層厚が1.4mに及び、地山のブロックを多量に含んだ盛土は周辺で大規模な掘削作業を行ったことをうかがわせる。堤に並行するSD201の規模とその後、溝に堆積した厚い水成層の存在は、周辺の水利環境が大きく変化した結果と考えられる。こうした状況を勘案すれば、第2段階の堤構築は大和川付替え工事に伴うものと推定し得る。

第3段階はおもにSD201の改修作業に伴う盛土と考えられる。明治時代に馬池外周の用水路を大規模に改修した記録が残されていることから、第3段階の堤はこの時期のものである可能性が高い。

第4・第5段階の堤は近代から現代にかけてのものと考えられる。

3) 小結

5世紀末の小方墳、長原212号墳を検出した。212号墳周辺の古墳群の動向を見ておきたい。長原古墳群は現在212基の古墳が確認されている。築造の時期は4期に分けられ、以下のとおりである。

I期：須恵器出現以前

II期：TK73～TK208型式

III期：TK23・TK47型式

IV期：MT15・TK10型式

墳丘形態は2基が前方後円墳、4基が円墳で、形態の確認されていない11基を除く残り195基が方墳またはその可能性の高いものである。

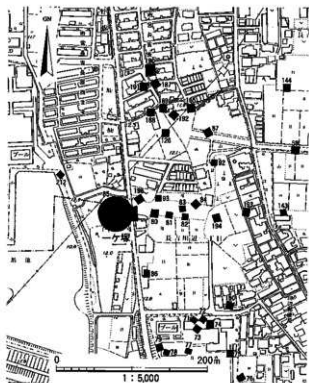


図25 長原古墳群分布図

図25は212号墳の所在する長原古墳群西南部の古墳分布である。時期の判明している古墳として、

I期：一ヶ塚(85号)・196号

Ⅱ期：71号・72号・73号・74号・77号・79号・80号・81号・82号・180号・187号・188号・190号

Ⅲ期：58号・83号・84号・86号・87号・143号・187号・188号・190号・193号・212号がある。

南部の71～74号周辺の古墳群の展開は現状では読み取れないが、一ヶ塚古墳周辺では、Ⅱ期の80～82号が、I期すなわち一ヶ塚古墳と196号墳を取り巻き、その周りを212号墳以下のⅢ期の古墳が、同心円状に配されたとみられる。

長原古墳群でも墳丘規模が50mを越えるのは円墳、造出し付円墳である塚ノ本古墳、一ヶ塚古墳の2基のみで、やはりI期の円墳である高廻り2号墳(170号)とⅣ期の2基の前方後円墳を除くと、基本的に10m前後の方墳か造出し付方墳であり、I期の周りに配される。

やや特異なのが一ヶ塚古墳周濠外縁に取付くように築造された196号墳で、墳丘は3.1m×4.1mの方形と推定されている[大阪市文化財協会1997b]。北側の周溝内から出土した壺形埴輪、甕形埴輪などからI期に比定され、5世紀初頭の造営と推定される。196号墳は一ヶ塚古墳の陪冢的な付属施設の可能性も考えられ、ほかのI期の古墳とはやや性格を異にしている。

長原古墳群の形成の契機となったのは塚ノ本古墳で、古市古墳群の最初期の大王墓級古墳である津堂城山古墳と併行する時期と推定され、器財埴輪を用いた祭式が整備・導入された津堂城山古墳と、性格が似ているとされている。ちょうど大王墓が大和から河内に移動してきた過渡期に当ることから、長原のI期の古墳の被葬者は、大和朝廷の変革に関与した者とみられている[櫻井久之2001]。Ⅱ・Ⅲ期に爆発的に現れる小方墳は、盟主墳である塚ノ本・一ヶ塚古墳の周囲を衛星状に幾重にも取巻いている。盟主墳の周りに数十年にもわたり継続的に造営されたことから、小方墳の被葬者と盟主墳とは非常に深い関係にあったものと考えられている。

今回の212号墳は一ヶ塚古墳の北西に位置し、一ヶ塚古墳グループでは現在、最西端である。周囲の調査が進めば、このグループの性格もより明確なものとなろう。

また本調査地に残されていた馬池東堤は、中世に形成された可能性が高く、大和川付替

え時に大規模な補修・拡幅が行われたと考えられる。東堤が構築される以前は、当地はおもに耕作地として利用されていたこともわかった。

第3節 99-46次調査

1) 層序とその遺物

調査区の南北端はSD202や攪乱により本来の地層が失われていたため、東西方向のアゼを2個所に設定し、断面観察を行った。調査区は馬池の西縁辺に当り、北アゼ断面は堤を含む池の端部の、南アゼ断面は池内部の地層堆積状況を示している(図26)。

第1層：現代盛土である。

第2a層：暗灰黄(2.5Y5/2)～褐灰色(10YR5/1)の極細～細粒砂混り粘土層で、にぶい黄橙色(10YR6/4)砂礫混り極細粒砂の薄層が挟在する。馬池に堆積した水成層である。須恵器・土師器・肥前磁器・瓦などを含む。

関西系灯明皿57は内面と外面口縁部は施釉するが、ほかは露胎である。18～19世紀前半に位置する。土師質羽釜64は羽の部分のみの破片である。14世紀代のものと思われる。

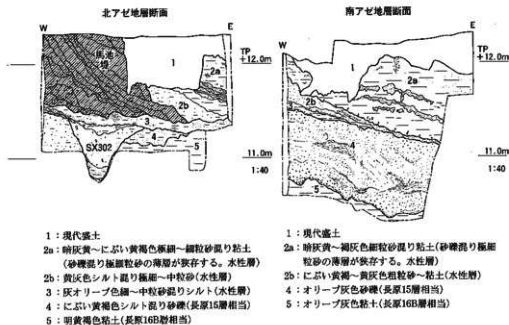


図26 断面図

本層の形成は19世紀前半と考えられる。

第2b層：にぶい黄褐(10YR4/3)～黄灰色(2.5Y5/1)粗粒砂～粘土層で、調査区南部では池の内側に向い粘土質が強くなる。馬池に堆積した水成層である。須恵器・土師器・17

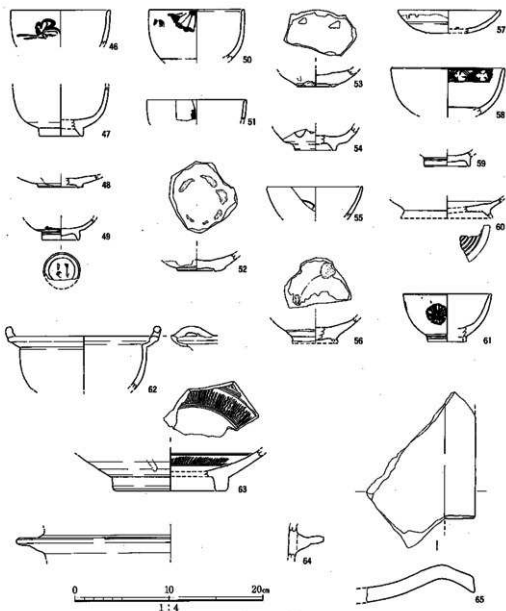


図27 各層出土遺物

第2a層(57・64)、第2b層(58・63)、第3層(46・47・50・51・53・54・62)、西堤盛土(48・49・52・55・56・59～61・65)

～18世紀代の肥前磁器・丹波焼および備前焼摺鉢などが出土した。

肥前磁器碗58は内面口縁部に四方棒文を施す。Ⅳ期である。唐津焼大皿63は三島手で、見込みに練り砂目痕がある。Ⅳ期と思われる。

本層は18世紀後半に堆積したと思われる。

なお、側溝掘削中に第2a～2b層中から緑釉陶器片が出土した。

第3層：灰オリーブ色(5Y5/2)細～中粒砂混りシルト層で、西堤のベースとなる水成層である。須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・中国製白磁・肥前磁器・瓦などを含む。以上の第2a～3層は長原2層に相当する。

肥前磁器碗46・50・51・54が出土した。46は広葉樹の葉文を描く。50は半菊花文を描く。いずれもⅡ期である。51は菊文のコンニャク印板である。Ⅳ期前半に属する。54は一重網目文で、疊付けは釉ハギ後、粗粒砂が付着する。Ⅲ期である。肥前陶器碗47は、高台は露胎でⅢ期である。唐津焼碗53は底部外面は露胎で、見込みに胎土目痕が見える。Ⅰ期である。関西系陶器鍋62は褐釉を施されている。18世紀前半に位置する。

本層は18世紀前半に形成したと考えられる。

第4層：にぶい黄褐(10YR5/3)～オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト混り砂礫～砂礫層で、長原15層に相当する地山である。

第5層：明黄褐(2.5Y6/6)～オリーブ灰色(5GY6/1)粘土層で、長原16B層に相当する地山である。本層上面ではナウマンゾウの足跡の可能性のある凹みを検出した。

2) 遺構とその遺物(図28～34、図版17・18)

第Ⅰ章第2節で述べたように基本的に5m間隔で1～9区まで設定した上、測量枕列で東西に二分し、E-Wを付して地区名とした。

i) 飛鳥～平安時代

第4・5層上面検出遺構

a) 溝

SD301(図28・30、図版17) 4・5区で検出した東西方向の溝で、SD303・305を切る。深さは0.3mで、下部の断面は方形を呈しており、木樋が埋没されていた可能性がある。飛鳥時代から奈良時代にかけての土器を含む。

須恵器杯身77・82・83が検出された。77は断面がセピア色を呈し、復元口径12.0cmで、TK43型式に属する。82は杯BⅠで、平城宮Ⅲである。83は杯BⅢで、平城宮Ⅴである。

8世紀後半まで機能した溝と考えられる。

SD302(図28・30・31) 5・6区で検出された幅2.0m、深さ0.7mの溝で、埋土は極細粒～細粒砂混り粘土層などの水成層で、下部からは須恵器・瓦器碗・中国製白磁・瓦などが出土した。

瓦器碗84は口縁部に強いナデを施す。13世紀前半と思われる。

須恵器甕94は断面セピア色を呈し、2本の凹線で形成した突帯の下に波状文を描く。TK47型式と思われる。

平瓦104・105は凹面に布目痕、凸面に縄目タタキ痕をもつ。105は側面を凹面に垂直の方向にヘラ切りし、凸面に粗い離れ砂を用いる。104は奈良時代以前、105は平安時代以降の瓦と思われる。

上記の遺物から13世紀前半に埋没した溝と推定される。

SD303(図28・31) 4W区を中心に検出された南北方向の溝で、幅は0.5～1.2m、長さは7.5m、深さは0.3mある。弥生土器以外は、時期を特定できる遺物は出土しなかったが、SD305に切られることから飛鳥時代以前の遺構とみられる。

弥生土器98は底部破片である。

SD305(図28・31、図版9・17・18) 5区を中心に検出された幅1.2～1.5m、深さ0.4m程度の溝で、南部はSD302に切られる。非水成の砂礫混りシルトなどで埋まっており、埋土からは飛鳥時代の須恵器

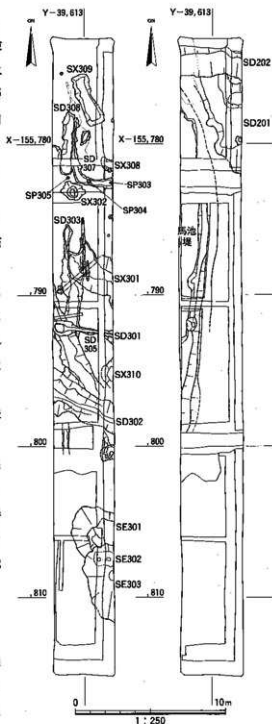


図28 平面図
(左:第4・5層上面 右:第3層上面)

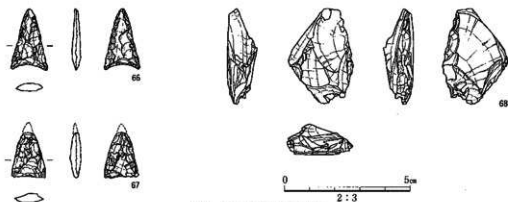


図29 SD305出土石器遺物

や土師器、石器遺物として石鏃・クサビが出土した。石器遺物はすべてサヌカイト製である。また、溝の底からはTK43～TK217型式に属する須恵器蓋杯のほか、須恵器甕・長頸壺、土師器高杯脚部が出土した。

石鏃は66・67の2点の無茎石鏃が出土した。66は凹基式、67は平基式である。形態から見ると縄文時代後期から弥生時代前期のものとみられる[高井健司・岡村勝行1993]。68はクサビである。上下両端に敲打によって生じた剥離痕が、不連続ながら認められる。

須恵器は杯蓋73、杯身87、壺89が見つかった。73は宝珠つまみが欠損した杯G蓋で、天井部に自然釉がかかる。TK217型式である。87は復元口径12.0cmで、TK209型式に位置する。壺89は長頸壺の破片で、肩に凹線が入り、体部下半に回転ヘラケズリを施す。飛鳥Ⅲである。

土師器は甕92と高杯96が出土した。92は復元口径14.0cmの甕Aで、頸部下にヨコハケが見られる。飛鳥Ⅱである。96は高杯脚部の破片で、5世紀代のものと思われる。以上の遺物から7世紀中葉の溝と推定される。

須恵器甕88は外面に平行タタキを施し、内面には当具の同心円文が残る。TK10型式頃と思われる。出土状況からはSD301・305のいずれに伴うかと判断できなかった。

SD306(図28・30・31) 3・4区で検出された南北溝で、幅0.2m、長さ3.5m、深さ0.05mである。

須恵器は杯蓋69、杯身75・79・81、高杯90が出土した。69は復元口径13.0cmで、天井部までヘラケズリを施す。TK43型式である。75は焼成が甘く、復元口径11.3cm、79は12.8cm、81は14.2cmで、いずれもTK43型式に属する。90は脚部の破片で、不整形円形のスカシ孔が一对2個穿たれている。TK209型式である。7世紀初頭の溝と考えられる。

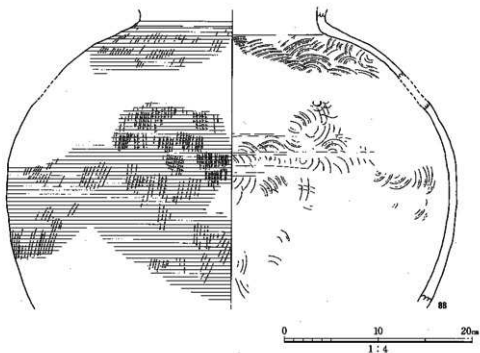
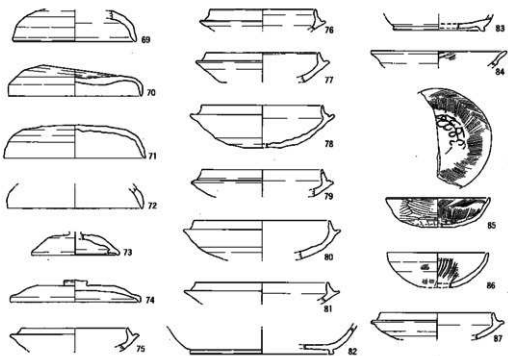


图30 遼陽出土須惠器·土師器

SD202(72)、SD301(77·82·83)、SD302(84)、SD305(73·87)、SD301·305(88)、SD306(69·75·79·81)、SD308(70·74)、SX301(76)、SX302(80)、SE301~303(71·78·85·86)

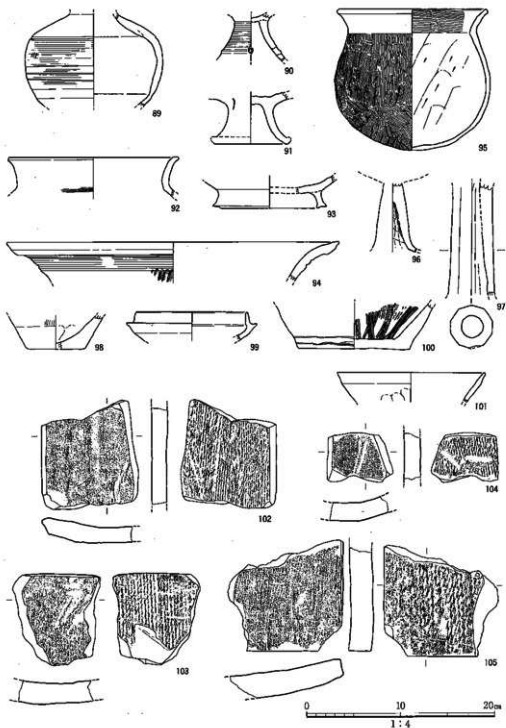


图31 遼陽出土遺物

SD202(103), SD302(94·104·105), SD303(98), SD305(89·92·96), SD306(90), SD307(101), SE302(91·97), SE301~303(95·102), SX301(93), 地山上面(99·100)

SD307・308(図28・30・31、図版17) 2区を中心に検出された溝で、SD308はSD307に切られる。SD307は地山起源の粘土や焼土を含む礫混り砂質シルトで、SD308は炭を含む砂礫混りシルトで人為的に埋められている。SD307からは土師器碗101が、SD308からは須恵器杯蓋70・74が出土しており、いずれも飛鳥時代から奈良時代にかけてのものとみられる。

70は復元口径13.0cmで、天井頂部までヘラケズリを施す。TK43型式である。74は杯BⅣ蓋で、平城宮Ⅰである。

101は復元口径15.6cmで、体部下半をユビオサエする。碗Cに該当すると考えられ、平城宮Ⅱである。

b)井戸

SE301~303(図28・30・31、図版10・17・18) 7・8区で検出された切合いをもつ素掘りの井戸群で、SE301が直径3.5m、SE302が直径2.0m、SE303が直径5.2mを測り、SE301はSE302・303に切られる。調査の途中で埋土が崩壊したため、一部の遺物は遺構を特定できなくなった。3つの井戸全体で古墳時代から平安時代にかけての須恵器・土師器や瓦器碗・瓦が出土した。

須恵器は杯蓋71と杯身78が出土した。

71は復元口径15.0cmで、天井頂部まで反時計回りのヘラケズリを施す。TK10型式である。78は底部までいいねいにヘラケズリした後、体部にナデ調整を加える。TK43型式で6世紀後半に位置する。

土師器は杯85・86、甕95が出土した。

85・86はいずれも外面にヘラミガキが施され、85の内面は底部にラセン状、体部に2段の放射状の暗文が見られ、86は体部内面に放射状の暗文を施す。杯Cで、飛鳥Ⅱに属する。95は外面をタテハケ、内面をヘラケズリ後、口縁部をヨコハケ調整する。口径は15.8cmで、最大径は器高のほぼ1/2のところに存在する。甕Aで、平城宮Ⅱに属する(写真1)。



95

写真1 SE301~303出土土師器甕

平瓦102は凹面に細かい布目痕と布の重ね目、凸面に縄目タタキ痕をもち、側面と凹面側

の側縁を面取りする。離れ砂は用いない。桶巻き作りの可能性がある。奈良時代以前の瓦である。

SE302出土遺物(図30) 須恵器高杯91は低い脚部で、TK209型式に位置する。土師器高杯97は脚部の破片で、ヘラケズリによって面取りし、10角柱になっている。平城宮Ⅱに属する。

c) 柱穴

1～3区を中心にSP301～303など複数の柱穴を検出したが、建物として組み合わせるものはなかった。

d) その他

SX301(図28・30・31) 4区で一部を検出した不定形の遺構で、深さは最大0.3m程度ある。

須恵器杯身76と壺93が出土した。76は復元口径11.2cmで、TK43型式に属する。93は高台部の破片で、壺Kと思われる。平城宮Ⅰである。8世紀初頭に埋没したと考えられる。

SX302(図28・30、図版17) 3W区で検出した不定形の遺構で、深さは約0.6mである。

須恵器杯身80は体部にていねいなヘラケズリを施し、復元口径14.3cmで、MT85型式に位置する。6世紀後半の遺構である。

SX309(図28、図版8) SD201の下面で検出された溝状の遺構である。当初はSD201の一部と考えられたが、断面観察による埋土の差異と、時期の下る遺物が含まれないことなどから別遺構であると判断した。杯片など古墳時代の須恵器が出土している。

SX308・310(図28) 2E区と5E区で一部を検出した土壇状の遺構で、須恵器や土師器が出土した。

このほか、地山上面で須恵器杯身99と備前焼摺鉢100が出土した(図31)。99は復元口径12.0cmで、TK10型式に属し、100はスリメが密に施されている。17世紀前半であろう。

ii) 江戸時代

第3層上面検出遺構

a) 溝

SD201(図28) 1・2区を北西-南東方向に延びる溝で、北部をSD202によって切られる。須恵器・土師器・焼締陶器などを含む。

SD202(図28・30～34、図版18) 瓦質土管を組み合わせた東西方向に延びる導水施設で、管の下には木板が敷かれていた。標高は東が高く、管の玉縁も東から西向きに挿入さ

れている98-8次調査では瓦質土管と木樋を組み合わせたSD201が検出されているが、いずれも馬池からの導水を目的とした施設であると考えられる。須恵器・土師器・肥前磁器・堺焼播鉢および丹波焼播鉢・瓦などが出土した。

須恵器杯蓋72は復元口径14.2cmで、TK43型式と思われる。平瓦103は凹面に布目痕、凸面に縄目タ

キ痕をもち、離れ砂は用いない。奈良時代以前の瓦と思われる。

唐津焼碗106は高台は露胎、見込みに練り砂目痕が3つ見られる。Ⅱ期である。肥前磁器碗107は体部外面には山文を描き、高台内外面に圈線を多用し、高台内に字款を入れる。疊付けは軸ハギしている。Ⅳ期でも前半と思われる。堺焼播鉢108は焼成が甘く、土師質を呈する。樹描き沈線がスリメとして密に施される。18世紀前半であろう。

瓦質土管109-111が出土した。いずれも玉縁をもつ土管である。109は胴部径12.7cm、同厚さ1.5cm、玉縁端部径9.2-9.5cm、全長24.3cmを測る。ほぼ円筒形の木型に布袋を被せて粘土板を巻き付け成形した。別個体の玉縁と擦り合わせるために、胴端部内面は時計回りにヘラケズリを施している。胴部外面は全体にタテ方向のナデが見られ、内面には粘土板合わせ目に施したと思われる棒状工具による幅約2cmの帯状のナデがある。表面は暗灰色、断面は灰白色の瓦質である。110は胴部径11.5-12.8cm、同厚さ1.4cm、玉縁端部径9.4-9.8cm、全長23.6cmを測る。木型からはずした後、内面の粘土板合わせ目に加えた棒状工具による調整で、全体的にやや歪んでいるが、25と同様のほぼ円筒形の木型を用いたと思われる。胴端部内面のヘラケズリは時計回り。表面は灰色、断面は灰白色の瓦質である。111は胴部径12.6-13.0cm、同厚さ1.4cm、玉縁端部径9.3cm、全長23.0cmである。木型に非常に細かい布目の袋を被せ、木型頂部に幅4.5cmの粘土紐(玉縁部として外に表れているのは、この内1.4cm)を巻いた上で、土管胴部となる粘土板を巻き付けたとみられる。粘土板合わせ目は棒状工具で幅2.5cmの帯状にナデられている。胴端部内面は別個体玉縁と擦り合わせのため、幅3.0cmにわたって時計回りにヘラケズリされている。外面はタテ方向にナデ調整。表面は暗灰色、断面は灰白色の瓦質である。25・33と同じ木型で作られたと思われ

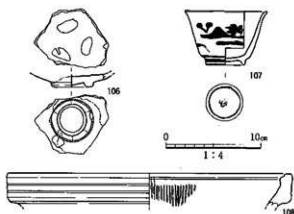


図32 SD202出土陶磁器

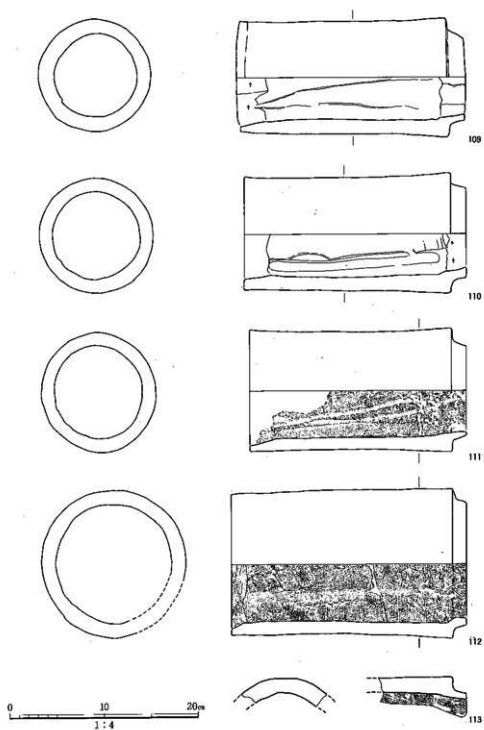


图33 瓦質土管
SD202(109~111)、北アゼ地山直上層(113)、重模掘削中(112)



図34 瓦質土管111内面 製作痕跡

る。

その他の瓦質土管としては、重機掘削中に検出の112、地山直上第3層出土の113がある。112は胴部径15.5～15.9cm、同厚さ1.4cm、玉縁部径13.0～13.5cm、全長25.0cmを測り、直径が大きい。頂部が高さ1.0cmにわたって直径を縮める砲弾形の本型に粘土板を巻き付け、

上端部を折り曲げた上で削り出し、玉縁部を成形している。胴部内面に細かい布目痕と平行線を描くコビキ痕(コビキB)がみられる。胴端部内面は幅1.5cmで時計回りにヘラケズリされている。表面は灰色、断面は灰白色の瓦質である。113は玉縁部破片で、粘土紐を加えて玉縁を成形している。

以上の遺物から18世紀前半の遺構と考えられ、新大和川開鑿後に布設された導水施設である。

b)その他

馬池西堤盛土(図26、図版12) 南アゼ付近から調査区内に現れ、北向きに延びる馬池西堤は、北アゼ付近で西寄りに角度を変えて再び調査区外に消える。北アゼで観察された堤断面では少なくとも12層に及ぶ盛土の単位を確認した。盛土は酸化鉄・マンガン斑の目立つ作土起源と見られる砂混りシルト層や、地山起源の礫層を多く含む砂質シルト層などからなる。各単位の盛土は固く締まり、構築時に叩き締められている可能性がある。西堤の盛土からは次の遺物が出土した。

肥前磁器は碗59・49・55・61、皿48が出土した。59は高台内外面に圈線を多用する。高台の径は大きい。Ⅳ期の初めと思われる。49は高台周辺に圈線を多用し、高台内に字款がある。Ⅳ期も前半である。55は弧線を描く。Ⅳ期と思われる。61は菊文のコンニャク印板で、高台周辺に圈線も見られる。Ⅳ期前半と思われる。皿48は前面施釉し、見込みと畳付けに練り砂目痕が付着する。Ⅱ期である。唐津焼は皿52・56が検出された。52は底部の削り出し高台周辺は露胎で、見込みに輪状に練り砂目痕が見える。Ⅱ期である。56は底部は無釉で、内面は白化粧するが、見込み部分は露胎である。Ⅰ期と思われる。

緑釉陶器60は皿と思われ、底部糸切り後、貼り付け高台を付け、見込みには鏡面がある。10世紀前半に位置すると思われる。

棧瓦65は右下を方形に切り取り、凹面に細かい離れ砂が付着する。18世紀以降のものである。

唐津焼や17～18世紀前半の肥前磁器、須恵器・土師器、13世紀代を中心とする瓦器・中国製白磁・瓦が含まれる。ベースとなる第3層に17世紀後半の肥前磁器が含まれることからそれ以降に築造されたと考えられる。

3)小結

本調査では馬池西岸に築かれた西堤と導水管を検出した。西堤については、盛土とペー

スになる地層に含まれる遺物を詳細に分析することで、当該部分の西堤が1704年に行われた大和川付け替えを契機に築造された可能性が高くなったほか、対岸部分で検出された99-42・43次調査の成果と併せ、その構築方法を検討する上でも貴重な資料を提供した。また、瓦質土管については、導水方向を確認するとともに、同様の施設が池周囲に沿って配置されている可能性が示された。

次に、北隣りの98-8次調査では稀薄であった奈良時代から室町時代の遺構・遺物についても、緑釉陶器片が出土したほか、13世紀前半を下限とするとみられるSD302などの遺構が検出された。

一方、98-8次調査と同様に、SD305をはじめとする古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺構・遺物の分布が確認されたことは、当該時期における集落の変遷を考える上でも重要な意味を持つものと考えられる。

第Ⅲ章 遺構の検討

第1節 発掘成果から見た馬池

第Ⅱ章で見たように、馬池東堤(99-42・43次)においては中世にすでに築堤があり、大和川開鑿以降、堤が拡張されたようすが看取でき、西堤(99-46次)では、大和川付替え後に新たに築堤されたことがわかった。古絵図を交えながら、若干の考察を加えたい。

1) 調査成果

a) 馬池東堤

馬池が廃止された時点での東堤の旧状は、遺存状態が良好な地点でTP+13.3m、幅約5mを測り、馬池底は高い地点でTP+10.5m、低い地点でTP+9.8mである。

築堤の最初期において中世の作土層上に、幅2m以上、層厚0.6mの盛土が施される。盛土下面はTP+11.1m前後である。堤外側には幅0.7~1.5m、深さ0.5m以上の溝が掘られ、溝底面から盛土上面までの比高は1.1mである。近世の堤と比較して脆弱の感を免れ得ない。

大和川開鑿工事(1704年)に伴うと考えられる次段階の盛土は、層厚1.4mにも及び、最初期の堤の西裾を大きく削り込み、堤を東側に拡張している。盛土上面のレベルはTP+12.0mである。堤外側に堤に並行させて、幅2m以上の溝を掘っている。溝底面と盛土上面との比高は2.2mである。盛土は地山のブロックを多量に含むことから、周辺で大規模な掘削作業があったことをうかがわせる。次の盛土はおもに上記の溝の改修作業に伴うもので、明治時代に比定される。

b) 馬池西堤

築堤のベースになる地層から17世紀後半の肥前磁器が見つかり、盛土からは17~18世紀前半の肥前陶磁器が出土することから、大和川開鑿後の築堤と考えられる。堤のベースの標高はTP+11.1~11.6mで、層厚0.7m以上の盛土が施されている。ちなみに廃止された時点での西堤の標高はTP+13.4mである。また東西方向に延びる導水施設は瓦質土管を用いた暗渠で、馬池からの導水を目的としていた。



図35 馬池周辺の字名

2) 絵図との比較検討

享保8(1723)年の長原村絵図(城宏氏所蔵、本書写真2)の大和川南岸に「残池新田」があることなどから、大和川開鑿以前から馬池が存在したことは確実である[黒田慶一2001][本書第Ⅲ章第2節]。馬池は大和川によって池面積が半減したが面積は8町弱を誇り、この地域ではもっとも大きな溜池であった。

大和川開鑿以前の承応2(1653)年の「狭山池懸御領私領高書帳」には長原村の名は見えないが、馬池や川辺村を通じて間接的に用水を狭山池から得ていたと考

えられ、東瓜破村も馬池から畑川を経由して取水していた[石原佳子2003]。馬池は長原村のみではなく、北や西に展開する村々にとって、中世においても、なくてはならない存在であった。また江戸時代の村絵図には、馬池東堤の東に接して井路が描かれているから、99-42・43次で検出した溝SD201に該当すると考えられる。

中世の馬池は、南から北に延びる「馬池谷」を利用して築造された。池底でTP+10m前後であった。現、大和川北堤はTP+17m前後、北堤の北側の自然地形部分は12mであるから、南から北に低く傾斜する地形をそのまま利用し、池底を掘り下げるなどの地業はなく、低い堤を巡らせただけの溜池であったと考えられる。

西堤は18世紀前半に水成層の上に新造された。図35の字名を見ると、馬池の西に接して「寺池」「池側」が見える。馬池の西側に存在した池を田畑に変えるために、大和川開鑿後、馬池の堤を高く頑強に池の面積当りの貯水量を大きくしたようである。その理由として、大和川による減反が考えられる。

大和川付け替えは周辺の村々に田畑の供出を余儀なくした。『正保郷帳』を見ると川辺村で村高581石の内23%、東瓜破村・西瓜破村では、両村あわせて2813石の内21%を河道として供出している。長原村の減反数は不明だが、享保8年の長原村絵図で大和川南岸の馬池の名残りを「残池新田」として開発していることから、減反は長原村にとっても深刻であったと思われる。西堤の新造は、田畑の拡大を目的とした可能性が高い。

第2節 河内国丹北郡長原村の景観と馬池

大阪市史料調査会主任調査員 渡邊忠司

1)はじめに

長原地域は、日蔭明神と俗称される延喜式内社 志紀長吉神社の鎮座する古代以来の由緒の地である。近世の村絵図をみても、居村の大半を占める大きな社叢を有する長吉神社の鳥居が大きく描かれ、その周辺に広がる居村をみることができる(図36・37、村絵図1)。地理的には旧東除川の流域に広がる低地と解析谷に位置しているが、現在の景観にはその面影はほとんどみられない。大阪市平野区に属し、周辺には北に出戸、東に六反、南に川辺、西に東瓜破の地域(いずれも平野区)がある。近世の村絵図と現在地域を比較すると、その位置関係や地理的な範囲にそれほどの違いはないことも見えてくる。

地域の景観に大きな変化をもたらした出来事は、宝永元(1704)年の大和川の付

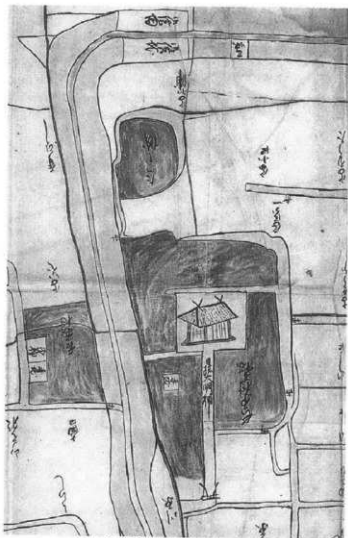


図36 村絵図1(年次未詳) 部分

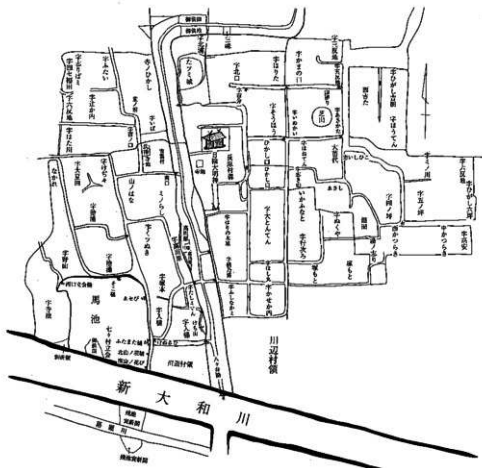


図37 村絵図 1 トレース図

絵図にみる字地名

- | | |
|------|---|
| 東北地区 | 1 ひかし吉田 西吉田 ほうてん |
| 東 | 2 かまの口 三反地 五反地 山廻り(城まわり) いぬかい
1 六反地 ミノ川 したひこ ひかし六坪 五坪 四坪 |
| 南東 | 2 大苗代 はねてん ひかし口 あき山 あさし 畑田 ぬくや
1 高安 中かつらき 西かつらき 湯ノしり |
| 南 | 2 塚もと 行次郎 いかふなど
1 かせの内 ほし丸 大くわんのん はりの木原 樋浦 ふしかつみ |
| 西南 | 2 入樋 たしミでん 高川原
1 入樋 塚本 くつぬき (馬池) |
| 西 | 2 寺地 野山 池浦
1 なかれ 池浦 大豆田 けぢけぢ |
| 北西 | 2 山ノはな ミノつし 南口
1 さこ川 西ノ口 |
| 北 | 2 六反地 辻の内
1 四七待田 しりばミ ふたい 室ノ前 いば 寺のひかし |
| | 2 北浦 北口 ほりた そうほう 四分一 |

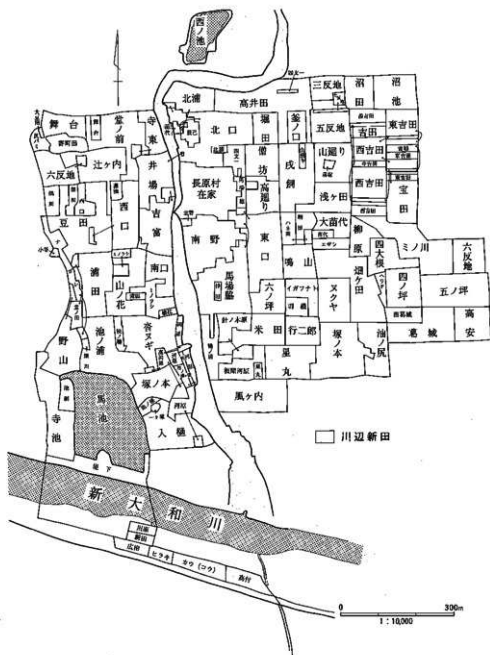


図38 長原地域近代の字名[大阪市文化財協会1978]より作成

替えであった。その時まで、村は狭山池に発して北流する東除川に厩村を東西に分断され、西は吉富、東は長原と呼ばれていた。付替え後、もとの東除川の河床と河川敷は川辺村の

新田として開発され、長原村領の中央を川辺村領が南北に横切る形状となった。

また大和川の付替えは、長原村の水利と農耕環境にも変化をもたらした。付替え以前の用水は東除川からの取水と、発掘調査の方で「馬池谷」と呼んでいる解析谷を塞ぎ止めて造られた馬池から配水されていた。付替え後は東除川が廃川となり、その元の川筋は新大和川からの取水と配水の井路となった(八箇用水)。また馬池は新大和川の開鑿によって南端部分がその河床となり、池の面積は若干減少し、池の形もやや変化した。集水もおもに新大和川から行われ、位置関係も新大和川に接するように変化している。

長原村には、旧来からの水利・用水関係に係わる絵図も含めて10点以上の村絵図が残されている。その絵図と現在の住宅地図と照らし合わせると、吉富地区は長吉長原西と長吉長原の一部、長原地区は長吉長原と長吉長原東にほぼ相当している。平成7年ごろまでは馬池もその一部は残っていたが、現在は消滅してしまった。それは地域の都市化・住宅地化による農耕の変化を象徴している。残された近世の村絵図をたどりながら、近世から現在にいたる地域の景観変化を概観してみよう(註1)。

2) 村絵図にみる村の景観と特色

近世の村絵図にみられる居村形態は村の形成過程を示し、また道路や井路、耕地の配置は生活や農耕環境の概要を示している。長原村も例外ではない。同村の村絵図にみられる特徴の一つは居村形態で、近世初期には二つ、中期以降には三つの大きな居村に分割されていることである。享保8(1723)年の村絵図3(写真2)には、これらが「長原村」と「長原村之内吉富」および「長原村之内たつミ」と記されている。

また同絵図には水路や村内の古跡も描かれる。それらには、元の東除川に開かれた川辺新田やそこを通る井路、「たつみ城」と記される古城跡、「小塚山」または「城山」「芝山」と記される古墳などがある。『大阪府全志』[井上正雄1922](巻之4、第3篇第2章第2節第2項)は、古墳について「高さ約式間の円丘にして面積式畝七歩なり、樹木繁茂せり。俗に城山」というと記し、文久元(1861)年の村絵図6でも「城山」と表示されている(図40)。

いずれも長原村が古代以来人々の生活や生産の場として、絶え間なく居住され続けた証である。村落周辺の井路は、この地域に展開した環濠集落の堀の役目を果たし、「たつみ城」(辰巳城)と呼ばれる城跡は、長原村の居村から北に位置し、周囲に堀を巡らした本格的な城郭の形状を残している(写真2)。居村と離れて造られていることから、明らかに非常時の地域防衛の拠点として、あたかも中世の山城の意味合いをもって築かれていたようであ

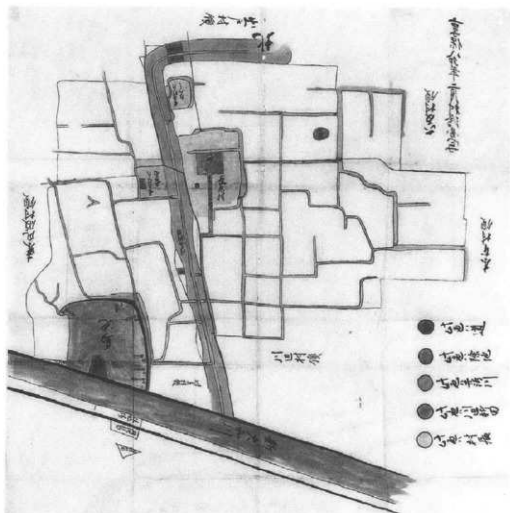


写真2 村絵図3 享保8(1723)年

る。

もう一つの特色は用水溜池としての馬池である。村領の南西端に築かれた溜池であるが、築造年月は不明である。長原村はか喜連村三か村、瓜破・南出戸への配水樋門が描かれ、池中には日蔭明神の御供田が置かれていた(図37、写真2)。

馬池の名前については、享保2(1717)年9月の「馬池用水之訳」を記した覚書に、「(馬池)と申来曆言上仕候」との書き出しで、名前の由来と用水溜池としての重要性および享保2年にいたるまでの経緯が記されている。

然者往古ハ氏神正一位日陰[虫損、大明神之神事・・・カ]毎年五月五日之旱天ニくつぬぎ

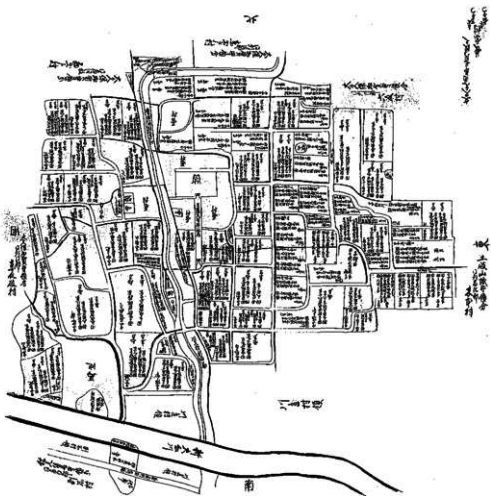


図39 村絵図6 文久元(1861)年

と申所にてくつぬがせ、則此池二而馬の足をひやし、夫々馬わたし候二付馬池と名付候、尤於今干形儀二右大明神之馬場二而馬をかけさせ申候、又樋共支配も長原村、又領地も長原村、勿論長原村高千三百三十拾石余之御田地此池二而そたて、外二池者無御座候、則此池床七町九反八畝貳拾八歩之所、新大和川二成半分減、用水屋兼毎年日損仕候御事、

この記録は馬池の名が氏神社日蔭大明神の神事に用いられる馬の足を冷やしたことから「馬池」と呼ばれた経緯を記している。神事は5月5日の競馬であり、享保2年の時点でも古来の年中行事として催されていたことを示している。馬池北東には字地「くつぬき」や、後には日蔭明神の参道東側に「馬場脇」という字地もみられる(図38・39)。

馬池が造られた時期は、神事との関係から考えれば古代からあったと漠然といえるが、

確かなことは不明である。馬池が長原村の管理下にあり、この池水によって村の用水のほとんどが賄われていたが、大和川付替えて池床が半減し、用水の確保に困難を来したことも記されている。

馬池は延宝検地帳〔検地は延宝7(1679)年施行〕にも「池床」として記載され、享保2年の記録と同じく、面積は7町9反8畝28歩であった。

百拾貳間

一池床七町九反八畝貳拾八歩

馬池

貳百拾四間

是者従往古之池床年数不知

往古よりの池床で、その年数は知れず、とあるように、築造年次は不明である。ただし少なくとも文禄検地〔文禄3(1594)年施行〕以前から存在していたことは、池中に置かれていた御供田の字地が「馬池」で、反別が「古検三反貳畝拾八歩」と記載されていることから確かめられる。ちなみに延宝検地時点での御供田の反別は3反5畝21歩、分米2石1斗4升2合であった。

3) 近世村落景観の成立

長原村の二分割された居村形態は、きわめて特徴的な村落景観である。享保8年の村絵図3(写真2)では、大和川付替え後に開発された川辺新田を挟んで、西に吉富、東に長原が向い合う。川辺新田の中央を新大和川からの用水井路である八箇用水が通るが、これは大和川の付替えと新川の開鑿によって断ち切られた東除川の名残の水路である。川辺新田はその河床と河川敷に開かれた新田であり、開鑿の際に村地を河床に取られた川辺村の代替地の一部であった。

この居村形態は近世以前からできあがっていた。長原村には、延宝7年の検地帳写〔天保9(1838)年の写〕が残されている。それによると、検地は延宝7年7月に本多兵部少輔の担当で施行され、検地帳は長原村と吉富村に分けて作成されていた。一冊は「河内丹北郡長原村検地水帳」と題され、もう一冊は「河内国丹北郡長原之内吉富村検地水帳」と題されている。このとき村高・反別が決められたが、長原村が852石6斗6升9合、反別61町8反2畝5歩、吉富村が村高480石5斗6升8合、反別33町8反2畝13歩となった。

また延宝検地帳によると、文禄検地は長東大蔵少輔正家を奉行として文禄3年に施行され、村高は長原村が757石2升、反別55町1反8畝23歩、吉富村が367石6斗6升、反別

26町1反5畝28歩であった。長原村の近世の村域も、他村と同様に文禄検地によって確定されている。延宝検地はこれらを再度確認した検地であった。

検地帳は近世の土地台帳であり年貢台帳である。近世の百姓・村にとっては、これが生活や生産の基礎台帳でもあった。検地は兵農・商農・職農の分離と石高制、また村切を実態化し、近世の領主と百姓の基本的な関係を確定した。その意味からすれば、「長原村之内吉富村」の表示にはなっていたとしても、検地帳が別々に作成され、それぞれの検地帳には長原村庄屋・年寄・百姓代の連署連印、吉富村庄屋・年寄・百姓代の連署連印があることをみれば、延宝検地時点でも二つの村として扱われていたことを示している。またそこに記された文禄検地を意味する「古検」の記録にも二つの村として明瞭に記されている。

『大阪府全志』(巻之4、第3篇第2章第2節第2項)は、長原地域について「本地は丹北郡に属し、長吉村と呼びしが、後に分れて吉富・長原の両村となり、後復た合して長原村と称し、旧吉富村は其字地となれり」と記している。長原地域は古代以来の由縁をもつ古い集落である。ここには、長吉村から吉富村・長原村への分村、さらにはその合併という歴史的な変遷の概略が手短かに述べられている。「長原」という地名は、長吉長原1丁目の発掘調査(NG92-2次)で出土した治暦2(1066)年の紀年銘をもつ木簡[清水和明・島居信子1996]が初見で、「長吉」よりも「長原」が後出とも取れる『大阪府全志』の記述は、にわかに首肯しがたい。

ただ、検地帳や近世絵図に描かれた村落景観、また『大阪府全志』の記述を合わせ考えると、長原地域が「長吉村」と呼ばれていた時期には吉富地区に居村はなかったこと、吉富地区は後に東除川の西岸を開発して得られた新田であった可能性は考えられよう。享保4年村絵図(カラー図版①)以後の村絵図には、いずれも川辺新田を挟んで居村が分割された状態が描かれている。集落や一定度の生活・生産基盤と領域が作り上げられる際に、その始まりから分村の状態で形成されることは考えにくいので、村落景観からすれば、吉富地区は「長吉村」の新田とみたほうが妥当である。

その後、吉富地区の居住人口が増えて「吉富村」となった。その時期がいつ頃かは確定できないが、中世であったことは、延宝検地帳に記された文禄検地時点でのそれぞれの村高と反別が明記されていることから確かめられる。この後、吉富は元禄4(1691)年11月、長原は同13年5月に代官辻弥五左衛門の改めを受けているが、このときは両地域を合わせた村高が記され、1333石2斗3升7合となっている。両地域とも長原村庄屋・年寄の連署・連印であることから、これは長原・吉富を合わせた村高であり、この時点では対外的には

一村として取り扱われるようになっていたことを示している。

4) 居村の増加と西方・東方

村絵図にみられる居村の特徴は、近世になって長原・吉富以外に「辰巳」地域が新しい居村として成長し、それに加えて村内の地域表示が西方・東方に変化してきていることである。『大阪府全志』はこの事情を、『河内志』が「長原属邑二」と記していることを引用しながら、「属邑二」について「此の字地となれる吉富と他の字地なる『タツミジョウ』とを指せるなるべし」と断定している。享保8年の村絵図3(写真2)に「長原村之内吉富」と「長原村之内たつミ」と記載されている地域である。

居村の増加は旧居村の拡大の結果である。その現われは享保8年の絵図に近いと推定される(年次末詳)字地名の村絵図(図36・37)で、「長原村森」と記される地域が、文久元年の村絵図6(図39)では長原の

居村地域と並ぶ居村ないし「馬場脇」として表示されている。明らかに日蔭明神の社義が屋敷地と耕地に変えられたことを示している。

これらの事実と、さきの『大阪府全志』の記述を考慮すると、元禄13(1700)年の石高表示は両地域が合併したことを意味し、以後は長原村の内部が西方と東方と地域表示されるようになったと考えられる。寛政3(1791)年4月の「永荒郷蔵屋敷並路敷絵図」(図40、村絵図4)では、長原地域に東方郷蔵と西方郷蔵が並んで建てられ、西方と東方

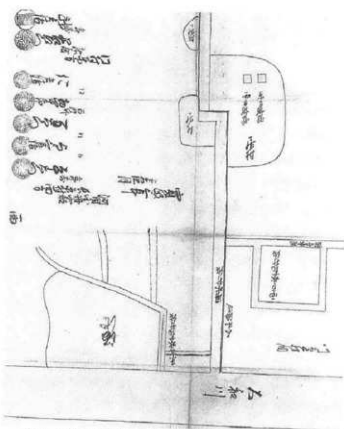


図40 村絵図4(永荒郷蔵屋敷並路敷絵図) 寛政3(1791)年

が単なる村内の居住地域表示となっていたことが記されている。

天保9(1838)年の延宝検地帳写は、その奥書に、天保8年9月14日に西方庄屋の土蔵が焼失したために、東方に保管されていた検地帳を写したことが記されるが、そこには西方と東方の庄屋・年寄・百姓代が連署・連印しており、長原吉富ではなく、東方・西方の表示となっている。ただし天保2(1831)年の年貢免状・皆済目録(図41)は、村

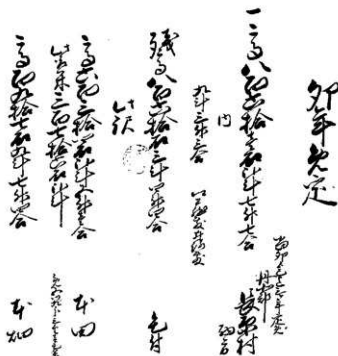


図41 天保2(1831)年の年貢免状 部分

高が861石2斗7升7合とあり、「長原村西方」と記されていることから、年貢はそれぞれの地域ごとに下付されていたようである。しかもこれらの記録や天保2年の西方の免状の村高からみると、西方が吉富、東方が長原に相当すると単純にいえない(同年免状)。

これは文化3(1806)年の村絵図5(図42)に記された村高が「一、八百七拾四石八斗四合 西方」、「四百七拾三石九斗四升貳合 東方」となっており、さきの延宝検地帳に記された長原村と吉富村の村高と比較すると、長原が西方、吉富が東方に当たると考えたほうが妥当である。しかし村内の居村位置からすればまったく逆となるので、元禄年間の辻弥五左衛門の改め以後は、耕地も高持百姓の屋敷地も一体化していたと考えるほうがよい。もし敢えていうとすれば、郷藏の位置関係および庄屋役の居住地によって西方と東方の表示になっていたといえよう。

この点は、文久元(1861)年7月 村絵図6(図39)には字地ごとに田畑反別の記載があるが、いずれの字地にも西方と東方双方の所持反別が記されていることから考えられる。居村が三箇所となった時期は、「辰巳」地域の居村化の時期が定かではないので確定はできない。寛政3(1791)年の村絵図4(図40)では、すでに辰巳地域も居村と表示されており、

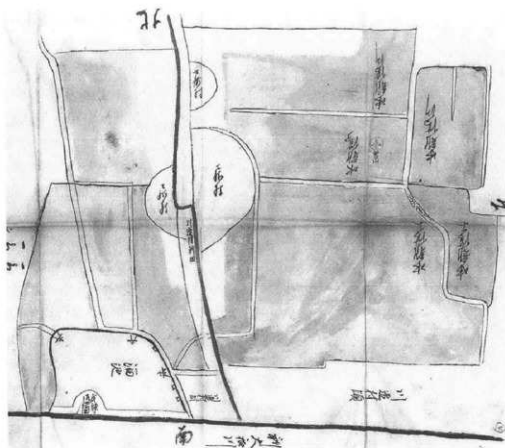


図42 村絵図5 文化3 (1806)年

おそらくは元禄13(1700)年ころの辻弥五左衛門の改めごろには居村3個所となっていたと考えられる。

5) 新大和川の開鑿と馬池の改変

長原村の変化で見逃せないのが馬池である。日蔭明神の御供田2石1斗4升2合が池中に置かれ、往古は無年貢地であり、延宝検地でも年貢地として認可されていた。元禄13年には代官辻弥五左衛門の改めで、再度無年貢地として確定されている(延宝検地帳)。

馬池は、遅くとも中世以来、長原村・川辺村・東瓜破村など八か村の用水溜池として重要な役割を果たしていた。近世には、いずれの村絵図でも村の南端に新大和川に接する形状で描かれる。大和川の付替えによって生み出された新たな村の景観とその変化の一つである。

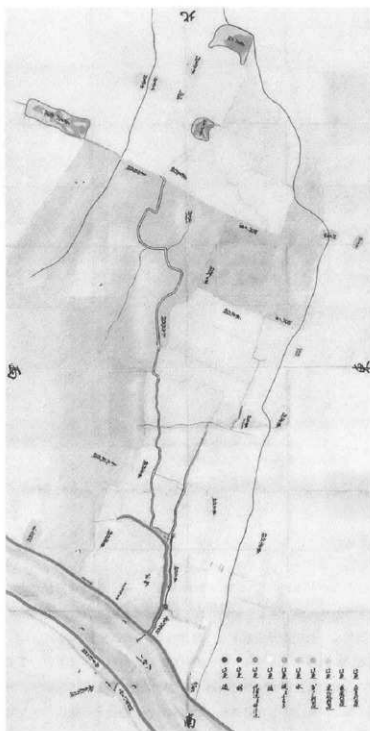


写真3 村絵図2 正徳元(1711)年

大和川付替えと新川の開鑿には、川辺村や喜連村など水路にあたる村々からの河床敷地提供という大きな犠牲があった。その代替地は、多くは元の大和川の河川敷で与えられたが、川辺村の場合は東除川の河床が与えられている。結果、長原村の中央部を南北に横切る川辺新田の出現となったのである。長原村も馬池の南端部分を新大和川の河川敷に提供した。さきの正徳元(1711)年や享保2(1717)年の記録には、馬池の由来に続けてその経緯を記している。

それによれば、新大和川の開鑿で馬池の南半分が河床に取られ、池床が半減したこと、そのことが馬池から用水を取っていた村々に水不足をもたらし、昔からの水取りの「時刻」

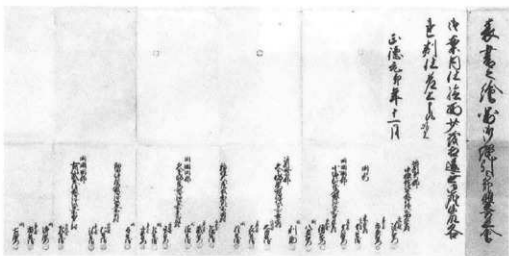


写真4 村絵図2の裏書き

が不都合となり、争論を引き起こしたことが記される。この争論に関係した長原・東瓜破・出戸と中喜連・西喜連・東喜連は正徳元年11月に水の配分や井路の浸え方など時割や維持・監理について新たな取り決めを行い、また新大和川の川床になった残地1反7畝歩については長原村が新田として開発することが了承されている。正徳元年の村絵図2(写真3・4)はその時作られた絵図である。

現在、馬池は埋立てられ近世の頃の姿をみることはできないが、現在にいたる変化の契機として新大和川の開鑿があったといえることができる。

6) おわりに

長原村の景観変化は新大和川の開鑿によってもたらされた。それにともなって地形的・地理的環境に大きな変化が生じ、それは村の景観、道路、農耕を巡る水利・用水経路、村落間の耕地配置などにも変化を促した。

東除川と馬池の変化はその象徴ともいえる。村中央を流れていた東除川は完全な用水路となり、河川数が隣村川辺村の新田となった。馬池も水面面積が縮小し、新大和川の南岸に残存地が生じ、新田として開発された。

新大和川の開鑿は、長原村の景観変化に大きな影響を与えた歴史的イベントであった。それは残された村絵図をたどることで確認することができる。十分とはいえないが、ここではそれを試してみた。

第Ⅲ章 遺構の検討

註)

(1)長原村の史料については、特に断らないかぎり城宏氏所蔵の史料による。

引用・参考文献

- 石原佳子2003、「馬池と八幡用水—近世大和川北岸地域の水利事情—」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XX、pp.58—76
- 井上正雄1922、『大阪府全志』4 大阪府全志発行所
- 大阪市文化財協会1978、『長原遺跡発掘調査報告』
- 1989、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』I
- 1990、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』II
- 1992、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』III
- 1996、『長原遺跡発掘調査報告』VI
- 1997a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』IX
- 1997b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XI
- 1999a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XIII
- 1999b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XIV
- 2000、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV
- 2001、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI
- 2002、『瓜破遺跡発掘調査報告』II
- 大阪府文化財調査研究センター2002、『津田城遺跡—一般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』第71集
- 大橋康二1994、『古伊万里の文様』理工学社
- 川西宏幸1978、『円筒埴輪総論』：『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、pp.95—164
- 九州近世陶磁学会2000、『九州陶磁の福年』
- 黒田康一2001、『大地の記憶—馬池の成立ち—』：大阪市文化財協会編『葦火』95号、pp.6—7
- 古代の土器研究会1992、『古代の土器1 都城の土器集成』
- 櫻井久之2001、『長原遺跡の小方墳』：『大阪府埋蔵文化財研究会(第3回)資料』大阪府文化財調査研究センター、pp.61—71
- 佐藤隆1992、『平安時代における長原遺跡の動向』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』V、pp.102—114
- 清水和明・鳥居信子1996、『大阪・長原遺跡』：『木簡研究』18 木簡学会、pp.60—62
- 『ゾウの足跡調査法』編集委員会1994、『ゾウの足跡化石調査法』地学ハンドブックシリーズ9 地学団体研究会
- 高井健司・岡村勝行1993、『層位発掘に基づく石炭形態の変遷的研究』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』V、pp.216—268
- 高橋工1999、『長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期—飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態』：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』II、pp.79—106
- 2000、『飛鳥時代の集落について』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV、pp.145—149

田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店

中世土器研究会1995、『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.41-44

2001、「長原遺跡の地層」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、pp.7-28

平田洋司1991、「4基の古墳と長原古墳群」：大阪市文化財協会編『華火』33号、pp.2-3

若林幸子2002、「土管内面の製作・調整痕跡について」：大阪府文化財調査研究センター編『津田城遺跡——般国道1号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』、pp.77-82

あ　と　が　き

20年にわたる長吉瓜破土地区画整理事業に伴う発掘調査も終りを迎えた。1999年前後は調査面積も減り、往年の忙しさを反対になつかしむ余裕さえ生まれたが、これまでの膨大な蓄積資料を前にすると、区画整理事業とともに歩んだ長い道のりが思い出され、感慨無量である。

またこの20年間の科学技術の進歩は目覚ましく、出土遺物もより良い方法で処理し、未来へ伝えることができるようになった。遺跡の図面や写真だけではなく、遺物を御覧にいれながら、長原・瓜破の歴史を語っていただけたらと思う。

末筆ではあるが、本書を成すに当って関係各位には並々ならぬ協力を賜った。改めて謝意を表すとともに、今後とも当協会の事業への変わらぬご理解とご支援をお願いする次第である。

(高橋 工)

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume XIX

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in fiscal 1999

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features and others in this text.

LC : Lithic concentration

NR : Natural stream

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Posthole or pit

SX : Other features

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と、地名・遺跡名などの固有名詞とを一括して収録した。

M	MT15	25	た	たつみ城	48
	MT85	36		盾形埴輪	24
T	TK10	25, 32, 35, 36	つ	塚ノ本古墳	26
	TK23	19, 25	と	土管	36~39, 41, 43
	TK43	30, 32, 35~37		土壌	5, 11, 13, 14, 18, 36
	TK47	25, 31	な	ナイフ彩石器	10
	TK73	25		長原170号墳	26
	TK208	25		長原196号墳	5, 26
	TK209	32, 36		長原212号墳	25~27
	TK217	32	は	白磁	30, 31, 40
あ	足跡化石	6, 11, 15, 16		八箇用水	48, 51
	飛鳥Ⅱ	32, 35	ひ	日蔭明神	45, 49, 50, 53, 55
	飛鳥Ⅲ	32		東除川	45, 47, 48, 51, 52, 56, 57
	暗文	35		肥前磁器	28, 30, 37, 40, 43
い	一ヶ塚古墳	4, 5, 26		肥前陶器	30
う	馬池谷	5, 16, 44, 48		備前焼	30, 36
え	円筒埴輪	19, 23, 24	ふ	文祿検地	51, 52
	延宝検地	51, 52, 54, 55	へ	平城宮Ⅰ	35, 36
か	唐津焼	10, 23, 30, 37, 40		平城宮Ⅱ	35
	川辺	44, 45, 47, 48, 51, 52,		平城宮Ⅲ	30
		55~57		平城宮Ⅳ	30
	関西系陶器	24, 30		平城宮Ⅴ	36
く	クサビ	10, 23, 32	ほ	方墳	25, 26
こ	御供田	49, 51, 55		掘立柱建物	5, 11, 12, 14
さ	堺焼	37	や	大和川	25, 27, 40, 41, 43~45,
	狭山池	44, 47			48, 50, 51, 55~57
し	志紀長吉神社	45		弥生土器	31
せ	石鏡	32	よ	吉富	47, 48, 51~54

CONTENTS

Preface

Explanatory notes

Chapter I Outline and progress of research work	1
S.1 Outline of excavations in fiscal 1999	1
1) Excavations	1
2) About the publication of the report	1
S.2 Outline and progress of excavations	3
1) Research area NG99-23	3
2) Research area NG99-42 & 43	4
3) Research area NG99-46	5
Chapter II Results of research in the South-western sector of the Nagahara Site	7
S.1 Research area NG99-23	7
1) Stratigraphy and remains of the strata	7
i) Stratigraphy ii) Remains of the strata	
2) Features and remains	11
i) The Kofun period ii) The Medieval period	
iii) The Middle Palaeolithic	
3) Conclusion	16
S.2 Research area NG99-42 & 43	17
1) Stratigraphy and remains of the strata	17
2) Features and remains	18
i) The Kofun period ii) The Medieval period	
iii) From the Edo to the Modern period	
3) Conclusion	25
S.3 Research area NG99-46	28
1) Stratigraphy and remains of the strata	28
2) Features and remains	30
i) From the Kofun to the Heian period	
ii) The Edo period	
3) Conclusion	40
Chapter III Discussion of features	43
S.1 Umaiike reservoir based on the results of the investigations	43

1) The results of the investigations	43
2) Discussion of the features and the village drawings	44
S.2 The landscape of Nagahara village Tanpoku county, Kawachi province and Umaike reservoir based on the village drawings in the Edo period	45
1) Introduction	45
2) The landscape and traits of Nagahara village based on the village drawings	48
3) The realization of the village landscape in the Edo period	51
4) Population increase in the Nagahara village, 'Seihou(Western)' and 'Tohou(Eastern)'	53
5) The construction of Shin-Yamato River and the changes to the Umaike reservoir	55
6) Conclusion	57
Bibliography	59

Postscript

Index

English Contents and Summary

Reference Card

ENGLISH SUMMARY

Introduction

The Nagahara site is located in southeastern Osaka city and contains archaeological materials dating from the Palaeolithic to the Edo Period. This report covers the excavations undertaken in three areas around the Nagahara site (with a total area of 598m²) following the rezoning of land in the Nagayoshi and Uriwari districts in fiscal 1999. The investigated areas consist of three southwestern areas (NG99-23, NG99-42 & 43 and NG99-46). Below is an outline of the notable materials recovered and phenomena observed during these excavations arranged chronologically by archaeological period.

1) The Middle Palaeolithic

From strata dating to 70,000 bp, the fossilized footprints of several species of megafauna, including the Bighorn deer, were unearthed in NG99-23. The footprints were of the same period as the footprints of NG94-52, which were reported in volume XIV. However, there is no evidence of human occupation at this site.

2) The Kofun period

NG99-23 is located at the eastern part of Umaikedani valley, where in earlier excavations archaeological remains associated with a Kofun period settlement have been reported. These include structural remains such as post-holes, ditches, a pit-dwelling, a well, a fence and pit features. NG99-23 is thought to be located at the southern end of this settlement. In NG99-42 & 43 a Kofun burial mound was unearthed (Nagahara Tomb No.212).

3) From the Asuka to the Nara period

In NG99-46 there were remains of ditches from the Asuka to the Nara period. In NG98-8, which is situated at the northern sector of NG99-46, there were numerous structural post-holes, ditches and pit features from the middle to late Kofun period.

In the northern end of NG00-12 one post-hole was found, and in NG00-29, which is located on the southern side of NG00-12, no such remains were found. Therefore, the post-hole is thought to be a part of a structure located in the southern end of the settlement.

4) From the Muromachi to the Edo period

In NG99-42 & 43 the eastern embankment of Umaike reservoir was constructed in the Muromachi period, and was reconstructed in the Edo period when the Yamato River was diverted into a new channel in 1704, known as the Shin-Yamato River. However, from the observation of archaeological evidence based on Hizen ceramic remains, the western embankment of Umaike reservoir seems to have been constructed after the dredging of Shin-Yamato River.

Further reading

Osaka City Cultural Properties Association

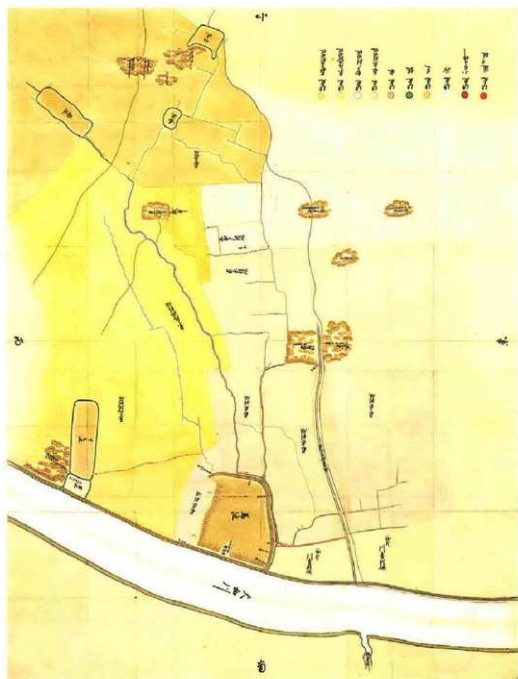
**1989-2000 *Archaeological Reports of the Nagahara Uriwari sites* Vols.I-XV,
Osaka (In Japanese, with English summary except for Vols.I-III)**

報 告 書 抄 録

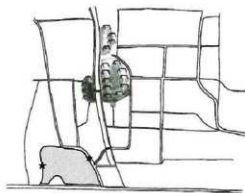
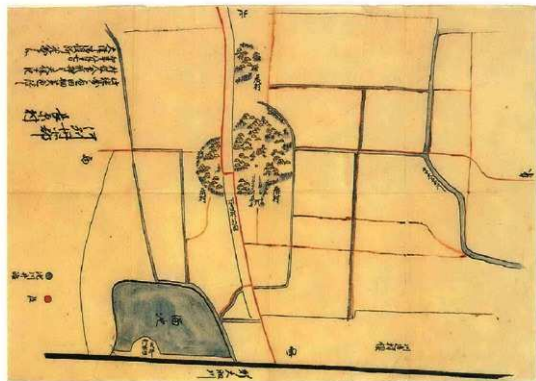
ふりがな	ながはら・うりわりいせきはつくつちょうさほうこく19							
書名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XIX							
副書名	1999年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	黒田慶一・高橋工・渡邊忠司							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながはらいせきは 長原遺跡	長原遺跡 大阪市長吉区 長吉長原西3丁目	27126	—	34°	135°	23次 19990708~19990913	97	土地区画整理事業 (長吉瓜破地区)施 行に伴う調査
				36°	34°	42次 19991115~20000306	170	
				00°	40°	43次 19991122~20000321	163	
						46次 19991201~20000323	168	
所収遺跡名	種別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		
長原遺跡	集落	旧石器時代				石器遺物		
	田畑	弥生時代				石器遺物		
	その他	古墳時代		掘立柱建物1棟・溝・土壌・古墳		土師器・須恵器		
		飛鳥~平安時代		柱穴・溝・井戸・土壌		土師器・須恵器		
		室町~江戸時代		溝・池の堤		陶磁器・瓦質土器・瓦器・土師器・瓦・瓦質土管		

原色図版

原色図版一 長原村絵図〔享保四年〕



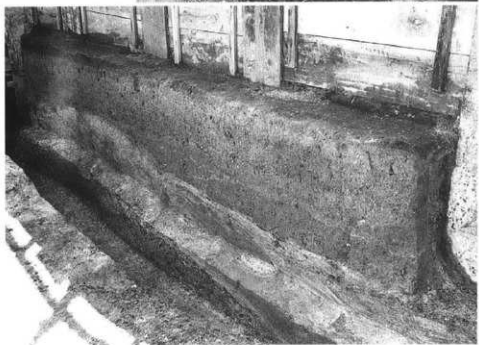
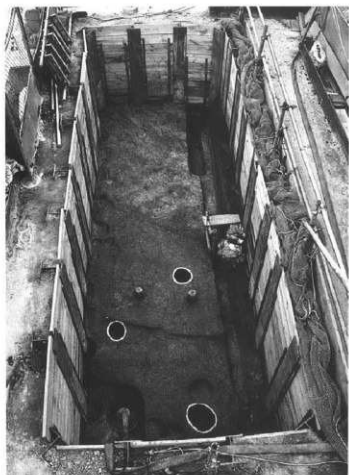
長原村絵図〔享保4（1719）年〕（城宏氏所蔵、付図の★印は発掘調査地）



長原村絵図〔天保14(1843)年〕(城宏氏所蔵、付図の★印は発掘調査地)

圖 版

I区全景(北から)



I区西壁(北東から)

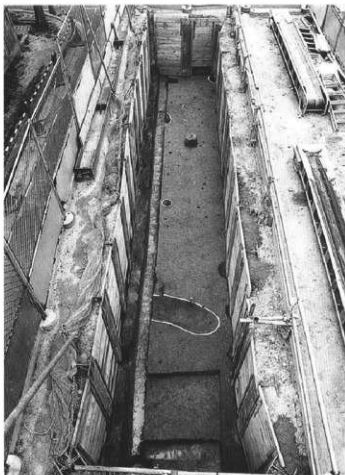


Ⅱ区全景(南から)

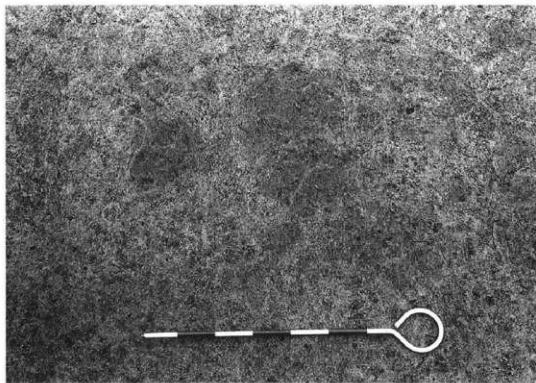


Ⅱ区 SD702(南から)

Ⅲ区全景(南から)



Ⅱ区中央 大型偶蹄類動物足跡化石(北から)



Ⅱ区 大型偶蹄類動物足跡化石検出状況

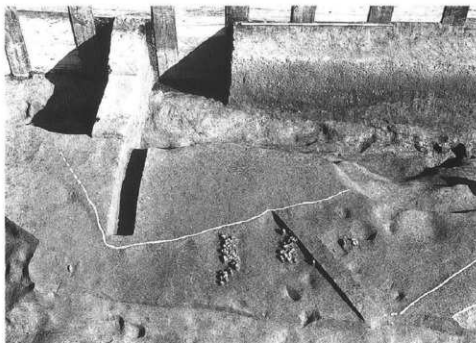


Ⅱ区 大型偶蹄類動物足跡化石完掘後

調査地全景(北から)



SD701検出状況(北から)



長原212号墳(西から)



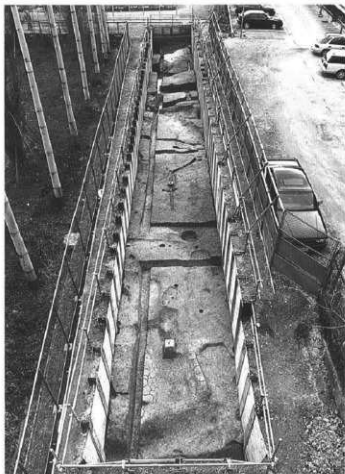
調査地全景(南から)



堤断面(北から)



堤断面(南から)



調査地全景(北から)



SX309(南から)



SD305(北から)



SD305(東から)



SE301～303遺構断面(西から)



SE301～303(西から)

調査地全景(北から)



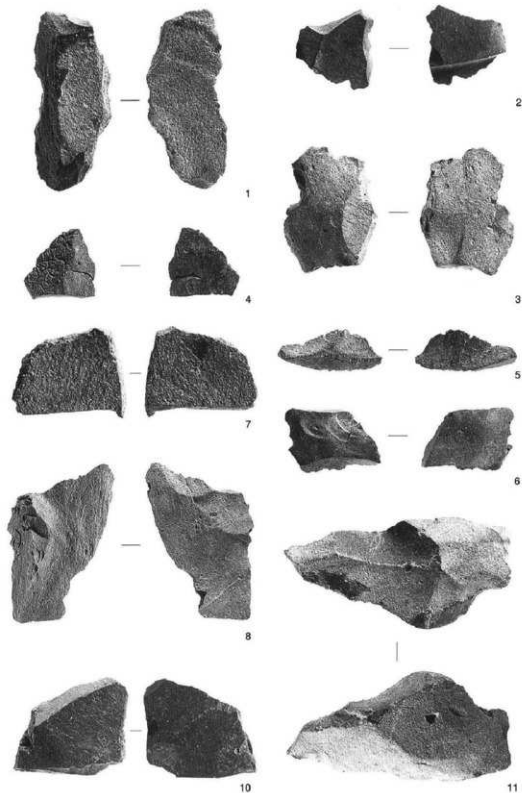
南壁地層断面(北から)



馬池西堤地層断面(北アゼ、南から)



馬池西堤地層断面(南アゼ、南から)



第4b層(1・2・6・7・10・11)、地山直上層(3・5・8)[1・4～6は1.4倍、2・3・7は1.3倍、8・11は1.2倍、10は原寸]



9



12



13



42



30



40



34



31



35



38



41



37



27



28



29



32



33





71



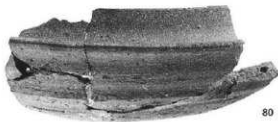
70



73



74



80



77



78



85

88



111



110



112

大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XIX

ISBN4-900687-67-5

2003年3月31日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL 06-6943-6833 FAX 06-6920-2272)

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区漂江南2-6-8

**Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume XIX

**A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in fiscal 1999**

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume XIX

**A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in fiscal 1999**

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association